

ミューズ NO.23 平和のための博物館・市民ネットワーク通信

発行：2009年8月

編集：山辺昌彦、山根和代、安斎育郎

翻訳：谷川佳子、加藤ニコル、竹田敦子、増田妃早子

イラスト：戸崎恵理子

事務局所在：東京大空襲・戦災資料センター内 山辺昌彦気付

住所：東京都江東区北砂1-5-4

Tel: 03-5857-5631 Fax: 03-5683-3326

全国の平和博物館、平和資料館などの活動について、お知らせします。

「平和のための博物館・市民ネットワーク」 全国交流会のご案内

第9回目となる平和博物館市民ネットの交流会を以下のとおり、東京にて開きます。今回は交流会の前後に、わだつみのこえ記念館、しょうけい館（戦傷病者史料館）の見学をおこないます。

1日目のもちかたについては、特別報告と3つのテーマをたてての討論交流をおこないます。2日目には、博物館の運営や財政活動について交流したいと思います。ぜひご参加をお願いします。

特別報告（予定）

- ・ピースおおさか（公立の平和博物館の現況について）
- ・ひめゆり平和祈念資料館（体験の継承、若い世代への受け継ぎ）
- ・東京大空襲戦災資料センター（空襲の研究のとりくみ）
討論の3つのテーマ
- ・若い世代に伝える～体験の継承のとりくみ
- ・博物館の輪をひろげる～市民の利用、教員、平和活動との連繋など
- ・博物館の内容の充実をはかる～展示、資料収集・研究活動など

1日目の最後に、「平和のための博物館・市民ネットワーク」の会計・事業報告もします。

日時 2009年12月5日（土）

13:30～18:00（終了後・懇親会）

6日（日）9:30～12:30

会場 千代田区内か文京区内の会場（明治大学、文京区民センターなどを検討中）

宿泊は各自でホテル等をご予約ください。水道橋、御茶ノ水あたりのビジネスホテルを確保されると便利です。



erico

参加者は報告レジメや配布資料など30部ほど資料をご持参ください。

会員の方は参加費が無料です。会費の納入がまだの方は、納入をお願いします。

報告や参加ご希望の方は事務局までご連絡ください。会場などが決定次第ご連絡いたします。

"Masahiko Yamabe" <yamabe1945@nifty.com>

各地の活動について

第五福竜丸展示館

主任学芸員 安田和也

今年は第五福竜丸の被災、ビキニ水爆実験から55年です。事件を直接知らない国民が約7割にも達するというなかで、ビキニ事件を若い世代に（広く市民のなか）どのように伝えていくか、多くの平和博物館とも共通す

るテーマでもあります。

前半の企画は、映画『第五福竜丸』公開 50 年記念の企画展示と映画の特別上映会（5 月半ば～6 月末）。この映画は、歴史的な事件を生きたものとして追体験する貴重な映像です。新藤兼人監督は、劇ではあるがドキュメンタリーのように事実に忠実に撮る手法で作ったと述べています。

映像はとても感動的です。貧しいが朴訥とした漁師町に生きる人びとの姿、海の男たちに突然降りかかった死の灰による被ばく、それに関わる人びとが描かれていきます。無線長・久保山愛吉とその妻、宇野重吉と乙羽信子という名優の互いのまなざし、子どもへの思い、取巻く人びとの暖かさ、それは当館が所蔵する久保山さんへのお見舞いの手紙 3 千通にもつながるものです。水爆という巨大な破壊、暴力とその理不尽さが観る者にひたひたと迫ります。

5 月 16 日には、映画の音楽を担当された作曲家林光さんの「ラッキードラゴン・クインテット」完成版の初演奏会が福竜丸の船体を背景に開かれ 180 人がピアノ五重奏のしらべに聴き入りました。

第五福竜丸パネル・資料展は、ピースあいち（3-4 月）、ピースおおさか（5-9 月）、アウシュビッツ平和博物館（7-8 月）をはじめ福岡、長崎、仙台、大阪・富田林などで開かれます。

マーシャル諸島に 6 年間住んで、彼の地のヒバクシャに寄り添い報道をつづけてきたフォトジャーナリストの島田興生さんの写真絵本『水爆の島マーシャルの子どもたち』がマーシャル 55 プロジェクトにより復刻出版され、普及協力がよびかけられています。これを記念して、展示館では子どもたちの夏のワークショップやミニ写真展などのイベントが開かれます。URL <http://d5f.org>
電話 03-3521-8494

2 周年を迎えた「平和の港」

山梨平和ミュージアム理事長 浅川 保
山梨平和ミュージアム—石橋湛山記念館—（平和の港略称 YPM）はオープン 2 周年を記念し、6 月 21 日、開館 2 周年記念行事を開催しました。当日は、作家で東京大空襲・戦災資料センター館長の早乙女勝元氏を講師に迎えて、甲府市のぴゅあ総合でおこなわれ、会場があふれる 230 名が参加、盛況裡に終わりました。

山梨憲法ミュージカルのミニ公演「ロラ・マシン物語」、人形アニメ「お母ちゃんごめんね」の上映に続いて、早乙女氏が「語りつぐ平和への思い—ある作家の体験から」と題して講演。氏は、ご自身の 12 歳での東京大空襲体験から、結審し夏にも判決が予想される東京大空襲訴訟での証言まで、過去、現在、そして未来について具体例をあげながら、縦横に語られ、大きな拍手を受けました。

印象に残った言葉は「社会的弱者の立場から過去を学ぶ」「知らないなら学ぼう、知っているなら伝えよう」です。続いておこなわれた賛助会員総会では、この間の活動報告、決算、活動方針等が提案、承認され、次いで春日正伸館長以下役員が承認されました。

総会で報告された活動報告と今後の課題は下記の通りです。

まず、1 階の「戦争と平和」の展示ですが、開館時は「甲府空襲の実相」だけでしたが、その後、「甲府連隊の軌跡」と「戦時下の暮らし」が加わり、現在では全体を通して、地域から戦争と平和を総合的に考える展示になっています。甲府空襲犠牲者 1127 名の氏名一覧、諸星廣夫さんのドラマ、重慶爆撃の実相、上海事変・無言の凱旋などが好評です。

2 階の展示「石橋湛山の生涯と思想」は、この 2 月に、湛山が中学時代に『校友会雑誌』に書き残した文章をそのまま紹介するなど青少年期を充実してリニューアルオープン、「大分わかりやすくなった」「1 階の展示と 2 階の湛山のセットの意味がわかった」との声が寄せられています。「全国初の湛山記念館」として、県外からの見学、問い合わせも増えています。今年は湛山生誕 125 年、10 月 18 日には松尾尊允氏らを講師に第 2 回石橋湛山シンポジウムなどを予定・準備中です。

2 月 26 日付朝日新聞に紹介された高根町の内田さんの日中戦争従軍日記など貴重な資料・書籍等の提供も続き、展示コーナー・2 階の図書コーナーもほぼ一杯になりました。全部を展示・紹介できないのも悩みの種です。

毎月の企画行事（戦争体験の証言・平和への取り組み等）は毎回 20～50 名が参加、盛況裡におこなわれ「平和の港」のメイン行事として定着しつつあります。企画を通しての新たな発見、交流・つながりが広がっています。

昨年 6 月の 1 周年記念行事での安齋育郎立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長の講演、昨年 10 月の世界平和博物館会議への参加、今年の早乙女氏の講演等国内外博物館との交流も進みました。また、NPO 法人として昨年 11 月に認証されました。

課題としては、何といても、中・高・大学生など若者の見学者をどう広げるかです。4 月以降、地元の中学、高校での学年・クラス単位の見学もふえましたが、まだまだです。未来の主権者である若者の見学増に向け、取り組みを強化したいと思います。

2 周年にあたり、山梨平和ミュージアムへの来館・活用、そして、全国各地の平和博物館との連携・交流を期待しています。

平和資料館・草の家：高知

研究員：藤原義一

この夏の平和資料館・草の家(高知市升形)の活動でヒットだったのは、アメリカ軍の高知大空襲(1945年7月4日)のことをストーリー漫画にして出版したことです。タイトルは「ぼくが見た高知大空襲」。草の家館長・岡村正弘さんの体験を、草の家の近所に住むアマチュア漫画家・西森智恵子さん(1968年11月28日生まれ)が描いたものです。

「カァ 「ひッ」 「まっ まぶしいッ」 急に家の中が昼間のように明るくなり驚いた僕が外を見てみると―― ……見たこともないような光の洪水でした……。アメリカ軍の大空襲の始まりを描いたシーンです。

草の家などは、この夏、高知市で「戦争と平和を考える資料展」(7月3日～9日)を開きました。この展示用に、4月に、高知大空襲の絵を募集しました。「私も体験者に話を聞いて絵にしたい」と思いたった西森さんは岡村さんに話を聞きました。何度もくわしく聞いているうちに「ぜひ、そのことを漫画にしたい」に。

アメリカの爆撃機B29の形を図書館で調べたり、漫画にするのは大変でしたが、毎日6時間ほど作業し6月に漫画が完成しました。

そして、草の家が1月から出している雑誌『高知の戦争 証言と調査』(戦争遺跡保存ネットワーク高知)の6号として7月1日に出版されました。

一冊買って読んでみて「親類にも送りたい」と、また買いに来る女性や「娘や孫にも読ませた」という女性もいて好評です。

A5判32ページ。定価は200円です。ご注文は、〒780-0861 高知県高知市升形9の11 平和資料館・草の家まで。Eメール・GRH@mail.seikyuu.ne.jp

NPO法人岡まさはる記念長崎平和資料館

理事長 高實康稔

本年上半期の主な活動と近々の活動予定は以下のとおりです。

- ・ 1月17日：機関誌「西坂だより」52号発送。
- ・ 1月23日：本館で良心的兵役拒否の代替サービスをおこなっているドイツ青年、ゲオルク・フライゼさんが長崎県立大学の平和講座に講師として招かれ、「記憶の文化」と題して講義。歴史教育の独日比較を基に、歴史上の事実を記憶する文化的比較と、記憶は必然的に善悪の判断を伴うことを英語で講義。シーボルト校から佐世保校へ衛星中継され、両校で受講。冒頭、良心的兵役拒否者を受け入れるに至った経緯を理事長が説明。
- ・ 3月18日：韓国の人権平和活動家・全恩玉さんが日本語と日本文化の学習を兼ねて本館のボランティア支援活動を開始。長崎大学の平和講座担当教員との交流も企画。

- ・ 4月12日：機関誌「西坂だより」53号発送。
- ・ 4月25日：全恩玉さんの第1回講話「韓国2008年キャンドル・デモとその後」。せっかく長崎に滞在中の全恩玉さんに韓国情報を話していただきたいという要望があり、相談のうえ3回の公開講話を計画したその第1回目。米国産牛肉輸入に端を発した抗議デモと人権問題を含む広範な運動へ発展した経緯について自己の体験を踏まえて詳細に語られ、質疑応答も充実して非常に好評であった。
- ・ 5月9日：全恩玉さんの第2回講話「韓国近現代史と歴史論争」。植民地時代や軍事政権時代を肯定的にみる歴史観の台頭と賛否の激論について、現状と歴史的背景をつぶさに語られ、植民地支配の根の深さと対立の深刻さを痛感させた。福岡からも多数の参加があり、この問題への関心の高さを示した。
- ・ 5月27日：米国ウェブスター大学教授タマシロ夫妻が多くの Paper Hands for Peace 作品(手を象った紙に書かれた平和メッセージ)を持参して来館。フライゼさんと理事長が歓迎対応。今後の交流を約束。
- ・ 6月6日：全恩玉さんの第3回講話「私の心の深いところを泣かせる声；韓国人原爆被害者」。韓国における被爆二世問題を中心に語られ、参加者との熱心な討論があった。
- ・ 6月22日：「日中友好・希望の翼」の派遣学生2名を決定。今年の訪中は上海―南京―徐州で、8月13～19日。学生2名とフライゼさんを含む8名で訪中予定。
- ・ 6月27日：ゲオルク・フライゼさんの最終講演「記憶と無視の文化」。本館での9か月のサービスと各地の視察、多数の講演と質疑応答の集大成として深い感銘を与えた。福岡や東京からも取材を兼ねた参加があった。なお、次の兵役拒否青年は9月に着任する。

ヌチドタカラの家・反戦平和資料館：沖縄・伊江島

館長 謝花悦子

阿波根昌鴻の平和運動に少々触れさせていただきます。

「戦争とは何か。人が人を殺し、悪欲を充たすために、奪い合い・殺し合う。戦争を目的としている国は、国民を愚民化し、機械的な人間をつくるでしょう。戦争は、この世の不幸の根源である。戦争は、天災ではない、人災である。ならば、どうすれば良いか。平和の武器は学習である。64年前の戦争で、嘘の教育を受け、騙されてきた。いかに自分達が、愚かであったか、無知の怖さを知らねばならない。」と言われました。

戦争準備が進んでいた伊江島は、4月16日から戦争が始まり、4月21日に終わりました。一本の木も一軒の家も残さず全滅しました。軍備の怖さを体験した私達は、沖縄に米軍基地の75%がある事を知り、基地撤去を訴え

続けておりますが、日米政府は県民の訴えに対し耳も心もなく、無視しつづけ強化しています。

人間の幸せは、ゆずり合い・教え合い、助け合って共に生きる中から生まれるものではないでしょうか。皆さん、これからの子ども達の幸せのために、豊かな社会をつくるために、共に努力してまいりましょう。

国内ネットワークのニュース

北海道開拓記念館：札幌市

研究員の寺林伸明さんを研究代表者とする 2001～2004 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))「日本の博物館における明治期以降の戦争関係史展示の現況と国際関係認識の課題について」(課題番号:13610412)の報告書が 2006 年 3 月付ですが、このほど刊行されました。歴史博物館・平和博物館・戦争博物館での日本近代の戦争についての展示や活動について、アンケートによる概況調査と訪問調査の結果が収録されています。特に訪問調査は、国立歴史民俗博物館、日本銀行金融研究所貨幣博物館、北海道開拓記念館、福島県立博物館、東京都江戸東京博物館、石川県立歴史博物館、沖縄県立博物館、仙台市歴史民俗資料館、蕨市立歴史民俗資料館、陸沢町立歴史民俗資料館、豊島区立郷土資料館、福生市郷土資料室、平塚市博物館、各務原市歴史民俗資料館、沼津市明治史料館、名古屋市博物館、栗東歴史民俗博物館、大阪歴史博物館、和歌山市立博物館、広島市郷土資料館、北九州市立自然史・歴史博物館、南風原文化センター、朱鞠内笹の墓標展示館、埼玉県平和資料館、神奈川県立地球市民かながわプラザ国際平和展示室、静岡平和資料センター、立命館大学国際平和ミュージアム、大阪国際平和センター、大阪人権博物館、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、沖縄県平和祈念資料館、群馬県護国神社、静岡県護国神社、北鎮記念館、防衛館、防衛資料館、史料館、北洋館の 39 館についておこなっており、貴重な調査結果が収められています。あわせて研究論文としては、寺林伸明さんの「博物館調査の分析」、朝治武さんの「人権博物館の戦争・平和展示」、佐藤雅也さんの「歴史民俗資料館と平和展示(3)」、三浦泰之さんの「史料紹介近代日本の博覧会における戦争展示」などが掲載されています。

Tel:011-898-0456 Fax:011-898-2657

<http://www.hmh.pref.hokkaido.jp/>

太平洋戦史館：岩手・奥州市

2008 年 3 月、4 月、7 月の戦跡調査では、ビアク島(支隊高地)で戦没兵士の遺体を発見しました。現在、厚労

省に働きかけて、遺骨収集の準備を進めています。

2009 年 2 月 17 日～26 日 民間外交使節団 ビアクへ戦跡調査と巡礼

2009 年 3 月政府派遣遺骨収集決定

2009 年 4～5 月の民間外交使節団 ビアク ジャヤプ
ラ方面を予定

2009 年 7 月七夕頃 民間外交使節団 サルミ・ジャヤプ
ラ方面を予定

2009 年秋 マノクワリ ヤカチ ナラマサ方面 詳細未定

(ウェブサイトより：

<http://www14.plala.or.jp/senshikan/>)

詳細は会報「戦史館だより」で知ることができます。

Tel:0197-52-3000 Fax:0197-52-4575

Email mppjapan@cameo.plala.or.jp.

仙台市歴史民俗資料館：宮城

調査報告書第 27 集足元からみる民俗(17)が 2009 年 3 月 31 日に刊行され、佐藤雅也さんの「近代仙台の慰霊と招魂ー戦死者祭祀の変遷」などが掲載されています。

Tel:022-295-3956 Fax:022-257-6401

<http://www.city.sendai.jp/kyouiku/rekimin/>

埼玉県平和資料館：東松山市

テーマ展 2008 年度IV「戦中戦後の鉄道輸送」が 2008 年 12 月 20 日～2009 年 3 月 1 日の会期で開催されました。戦時下の統制経済と物資不足の中で、鉄道をはじめとする物流網の整備は重要な課題でした。その中で、鉄道が担った戦時下の輸送について、埼玉県内の鉄道資料を中心に紹介したものです。展示図録を作成しています。クローズアップコーナーでは開催期間中に展示替えをおこない、12 月 20 日～1 月 25 日は戦時中の駅弁包装紙を、1 月 27 日～3 月 1 日は蒸気機関車の部品をそれぞれ展示しました。

時代を追って切迫してくる鉄道輸送について 6 つのコーナーに分けて展示していました。

1 鉄道黄金期

1937 年 7 月 1 日の時刻改正により、東海道本線の急行本数は過去最高になるなど、鉄道は黄金期を迎えますが、わずか 6 日後の 7 月 7 日に日中戦争が勃発し、戦時輸送へと舵が切られていきます。このコーナーでは、鉄道黄金期を象徴する特急列車の写真や幻となった 1940 年の東京オリンピック開催記念切符などを紹介していました。

2 強まる戦時色

日中戦争が長期消耗戦となっていく中で、鉄道が戦時

体制を進めていく上で重要な産業と位置づけられ、次第に戦時色を強めていく姿を、戦時下ならではの割引制度や当時の国鉄大宮工場の資料などを用いて展示していました。

3 増え続ける輸送需要

生産増強のための物資輸送だけではなく、軍需工場への通勤、そして学童疎開、食糧買い出しなど輸送需要は高まり、車内は殺人的な混雑となります。この状況をデータや当時のポスターなどにより紹介していました。

4 厳しくなる輸送制限

1940年末の多客期から乗車制限が開始され、その後、戦局悪化に伴い輸送制限も厳しくなっていきます。1944年4月からは100km以上の旅行には証明書が必要となりますが、このコーナーでは当時の旅行証明書や新聞記事などを展示していました。

5 物資も人手もなくなった

戦局が悪化してくると、物資不足だけではなく、多くの若者が出征し働き手が激減したため、勤労働員の学生や女性を積極的に登用するようになります。当時の雑誌などから鉄道の現場で働く女性にスポットを当て、体験談を交えて紹介していました。

6 収まらない混乱・終戦

終戦を境に復員、引き揚げ者、進駐軍、復興資材の輸送など戦時下を上回る輸送要請が発生しました。さらに敗戦による道徳心の低下などにより鉄道輸送は戦時中よりも混乱し、列車事故も頻発しました。ここでは、買い出しのため大混雑する列車の写真などで紹介するほか、進駐軍専用列車の模型も展示していました。

ギャラリー展 2008年度2「兵士が描いたスケッチと子どもたちの絵」が2009年3月7日～5月10日の会期で開催されました。兵士が帰国後に描いた軍隊生活のスケッチや都内から県内に疎開してきた児童たちが描いたクレヨン画などを紹介していました。

新収資料展「寄贈資料が語る戦争の記憶」が2009年5月16日～6月28日の会期で開催されました。2008年度に寄贈された資料の一部を展示・紹介したものです。

1月の映画会は2009年1月17日に開かれ、劇映画「はしれリュウ」を上映しました。これは、秩父地方を舞台に、家族愛や働くことの尊さ、平和の大切さを描いた作品です。

2月の映画会は2009年2月4日に開かれ、アニメ「マヤの一生」を上映しました。これは、愛犬マヤと家族の心温まる交流を描きながら、戦争が小さな動物の命をも奪うということを伝えるとともに、マヤと少年の愛情と絆をとおして命の大切さを語りかける物語です。

3月の映画会は2009年3月20日に開かれ、洋画「戦場のアリア」を上映しました。これは、舞台が第一次世界大戦下の仏・英・独が攻撃しあうフランス北部の戦場で、歌手のアナがテノール歌手の夫に最前線の戦場まで

会いに行き、2人でアリアを兵士達のために歌うというもので、1914年のクリスマス・イブに起こった実話を題材にした作品です。2006年に公開されたものです。

4月の映画会は2009年4月29日に開かれ、アニメ「うしろの正面だあれ」を上映しました。これは、下町で暮らしていた一家を襲った東京大空襲、落語家だった故林家三平の夫人である海老名香葉子さんの少女期の実体験を描いた作品です。

5月の映画会は2009年5月23日に開かれ、「父と暮らせば」を上映しました。

6月の映画会は6月20日に開かれ、アニメ映画「ピルマの堅琴」と「海からぶたがやってきた」を上映しました。

7月の映画会は7月11日に開かれ、「ひめゆりの塔」を上映しました。

Tel:0493-35-4111 Fax:0493-35-4112

<http://homepage3.nifty.com/saitamapeacemuseum/>

丸木美術館：埼玉・東松山市

大津定信展が2009年1月17日～2月28日の会期で開催されました。大津定信は愛知県名古屋市在住の71歳の前衛書家・現代芸術家です。「文明は資源の枯渇を招き、環境と心を破壊している。その弊害がもたらした恐ろしい核兵器は、無差別無抵抗の殺人、人類最大のテロの兵器であり、地上から絶滅させなければならない」と考えた彼は、広島の実験地で採取した土や砂を使い、一貫して原爆をテーマにした作品を発表しています。また、2005年ドイツ・フュルト市立公園、2007年ニューヨーク国連本部前をはじめ、毎年8月6日には国内外で平和を願うパフォーマンスをおこなってきました。画面の上に被爆した土や砂を敷きつめ、自身の指や顔など全身を使って被爆者の姿をかたちづくる作品。「平和」の文字を同一の画面に日本語、英語、アラビア語など多数の言語で記す作品。あるいは大量の紙に「命」の字を書いて周囲を燃やし焦がす作品など、彼は力の限り全身でストレートなメッセージを発し続けています。丸木位里・丸木俊夫妻の残した共同制作《原爆の図》を常設展示する丸木美術館において、これらのメッセージがどのように響き、新たな意味を持つことができるか、ということで開かれたものです。

丸木位里・俊《足尾鉍毒の図》展が2009年3月7日～6月6日の会期により開催されました。水墨画家・丸木位里(1901-1995)と、油彩画家・丸木俊(赤松俊子、1912-2000)の2人が晩年に取り組んだ連作が《足尾鉍毒の図》です。日本の公害の原点ともいわれるこの事件を、丸木夫妻は現地取材を重ねながら全部で6点の連作に描きだしています。この展示は、《足尾鉍毒の図》を所蔵する群馬県の太田市の協力により、丸木美術館では13

年ぶりの公開でした。

「丸木スマ・大道あや展—命を織りなす絵画」が2009年6月13日～9月5日の会期で開催されています。2008年夏に相次いで大規模な展覧会が開催され、注目を集めた母子の画家・丸木スマと大道あや。ともに人生の老境にさしかかってから絵筆を持ちはじめた2人は、色彩豊かで生命のよろこびがあふれ出るような世界を描き出し、見る人の心を動かししました。花や生きものたちに注がれる2人の視点は、一見よく似ています。しかし、自然と一体になって心の向くまま奔放に筆を走らせたスマに対し、あやは対象をじっくり観察し緻密な筆づかいで画面の隅々まで気を配るなど、2人の絵には本質的な違いも感じられます。今回の展覧会では、約50点のスマの絵画を中心に、丸木美術館近在の方が所有するあやの絵画を数点紹介しています。2人の作品を対比することのできる貴重な機会です。

Tel:0493-22-3266 Fax:0493-24-8371

<http://www.aya.or.jp/~marukimsn/top/kikaku.htm>

千葉市立郷土博物館 : 千葉

ちば市史ミニ企画展「下志津軍用地と戦後の開拓」が2008年11月1日～2009年3月15日の会期により開催されました。市史編纂担当が進めている仕事を、市民に広く知ってもらうために、2008年度から博物館2階の展示室の一面を使用して小規模な展示をおこなっています。市史では、戦後の下志津軍用地の開拓に関連した聞き取り調査を進めています。今回の企画展では、この調査に関連して借用資料などを展示し、急速に姿を変えつつある開拓地の歴史をとり上げていました。

Tel:043-222-8231 Fax:043-225-7106

http://www.city.chiba.jp/kyoiku/shogaigakushu/shogai_gakushu/kyodo/kyodo_top.html

東京大空襲・戦災資料センター : 東京・江東区

2009年第1回特別展『死んでもブレストを』原画展—その時、墨田電話局では何が起こったか」が2階会議室で2009年2月25日～4月5日の会期により開催されました。1945年3月10日、東京下町の東京中央電話局墨田分局(通称・墨田電話局)は焼失しました。電話局の交換手たちは空襲のさなかでも、「ブレスト(送受器)は死んでもはずすな」の合い言葉で、残って交換作業を続けていました。退避命令が空襲開始1時間後になり、その時は空襲の火災がひどく局の建物も炎に包まれ、逃げ道を見いだせなくなりました。このため、空襲の当夜、墨田分局に宿直でいた41名のうち、28名の交換手を含む31名が亡くなるという大きな犠牲を出しました。この悲劇を、作家の早乙女勝元さんが絵本『死んでもブレ

ストを』(1981年刊)に書き、遠藤てるよさんが挿絵を描いています。今回の特別展では、挿絵の原画14枚と、墨田電話局の建物や慰霊碑などの写真を展示しました。開催趣旨は原画を見ることを通して、惨劇の状況と、なぜ多数の犠牲者が出たのかを知るとともに、戦争の悲惨さ、平和と命の尊さを改めて考えることでした。

特別展開催に先立って、2月24日に開会式が開かれ、被災当日非番で助かった方が同僚を亡くした悲しみを込めて、書き残された手記の一部が読みあげられて、紹介されました。また、歌手の黒岩安紀子さんが墨田電話局の悲劇を主題にした「母は老いても」を歌いました。4月4日には北原久仁香さんと朗読ワーク「言の葉を愛でる」による絵本『死んでもブレストを』の朗読会が会場で開かれました。

戦争災害研究室の研究会はこの間2回開かれました。第22回研究会は2009年1月31日に写真家の広瀬美紀さんが「仮埋葬地調査の中間経過報告」と題して報告しました。第23回研究会は2009年4月12日にドイツ現代史専門で大阪大学大学院准教授の木戸衛一さんと、日本現代史専門で政治経済研究所研究員の植野真澄さんが『空爆の歴史』『空の戦争史』の書評をし、著者の荒井信一さんと田中利幸さんも書評に対する回答をしました。

戦争災害研究室の研究成果の発表では、『政経研究』92号(2009年6月刊)に青木哲夫さんは「日本の民防空における民衆防護」を、大岡聡さんは「戦災復興史の課題—松村高夫・N. ティラッソー・長谷川淳一・T.メイソン著『戦災復興の日英比較』に寄せて」を、それぞれ掲載しました。鬼嶋淳さんは「1970年代における空襲・戦災記録運動の展開—東京空襲を記録する会を中心に」を『日本史攷究』32号(2009年6月刊)に発表しました。山辺昌彦さんは「平和のための博物館と歴史学」を『歴史学研究』854号(2009年6月刊)に発表しました。

開館7周年記念「東京大空襲を語り継ぐつどい」は2009年3月7日に江東区亀戸のカメリアホールで開かれ、次世代の語り継ぐ世代の活躍が紹介されるとともに、清岡美知子さんが3月10日の体験を話し、女優の渡辺美佐子さんが「あの頃の東京」と題して講演し、麻布での空襲体験などを話しました。

東京大空襲・戦災資料センター編『岩波 DVD ブック Peace Archives 東京・ゲルニカ・重慶—空襲から平和を考える』が2009年7月16日に岩波書店から発行されました。これは、立命館大学国際平和ミュージアムの常設展図録『平和ミュージアム』からはじまった『岩波 DVD ブック Peace Archives シリーズ』の第4作目で、東京大空襲・戦災資料センターの展示図録であり、戦争災害研究室の研究成果を伝えるものでもあります。空襲のはじまりから、ゲルニカ爆撃、重慶爆撃、ヨーロッパ、東京・日本への空襲、さらに戦後の復興・補

償問題や戦後の空爆、さらに、博物館などでの空襲被害の記録・研究や展示まで、写真とともにわかりやすく解説しています。付録のDVDには空襲の歴史をたどるジュニア向けの映像、体験者の早乙女勝元さん・橋本代志子さん・星野ひろしさんのインタビュー映像、日本や重慶空襲の記録映像と、戦災資料センター所蔵の空襲被害写真や、被災品・体験画などの写真約650点が収録されています。

Tel:03-5857-5631 Fax:03-5683-3326

<http://www.tokyo-sensai.net/>

わだつみのこえ記念館：東京・文京区

わだつみ会と共催で「わだつみフォーラム」が開かれました。第4回は2009年4月26日にわだつみのこえ記念館で開かれ、「キムはなぜ裁かれたか」と題して内海愛子さんが講演しました。第5回は2009年7月4日に中央大学記念館で開かれ、「特攻と抒情」と題して八柏龍紀さんが講演しました。

Tel&Fax:03-3815-8571

<http://www.wadatsuminokoe.org/>

女たちの戦争と平和資料館：東京・新宿区

第7回特別展「証言と沈黙 ―加害に向き合う元兵士たち」が2009年7月4日～2010年6月20日の会期で開催されています。おびただしい数の残虐な強かんがあった戦場。支給された「突撃一番」を手に、行列を作って順番待ちをした慰安所。私たちの父や祖父が体験した戦争は、性暴力を抜きに語ることはできません。この20年間に集められた、被害女性たちの証言がそれを物語っています。しかし自らの加害に向き合う日本軍元兵士の証言はわずかしかなかった。彼らはどのように強かんや慰安所を語り、あるいは語らなかつたのでしょうか。飢えと病気が蔓延した無残な戦場からの生還は、「被害者」としての記憶しか残さなかつたのでしょうか。自らの戦争責任・戦後責任を問わずにきた日本の戦後を、性暴力の加害を糸口に考えるものです。主な展示内容は、日本兵の戦時性暴力はどう語られ、記録されてきたか、戦後の東京裁判とBC級戦犯裁判、1990年代からの各国被害者による損害賠償請求裁判、2000年の女性国際戦犯法廷…性暴力は戦争犯罪としてどう裁かれたか、元兵士の手記や回想録、戦争文学などにみる慰安所や戦場強かん、映画に描かれた日本兵と戦場の女性たち、撫順戦犯管理所と中国帰還者連絡会（中帰連）の元兵士たち…彼らはどのように自らの加害に向き合うようになったのか、加害を語る元兵士たち…中国、ビルマ、フィリピン、東ティモールなど、被害を訴える各国の女性たち…南北コリア・中国・台湾・フィリピン・インドネシア・マレーシ

ア・オランダ・東ティモール・日本、日本各地の平和資料館・戦争記念館…国公立ミュージアムへのアンケート調査と民間のミュージアムでの取り組みにみる戦争加害の展示、兵士たちの手記・戦友会誌・アルバム・「突撃一番」などです。

Tel:03-3202-4633 Fax:03-3202-4634

<http://www.wam-peace.org/jp/>

高麗博物館：東京・新宿区

「朝鮮人戦時労働動員（強制連行）を考える―加害の記憶と和解」が2008年10月29日～2009年1月11日の会期で開催されました。朝鮮人労働者たちが募集・官斡旋・徴用によって朝鮮から戦時労働動員（強制連行）され、鉱山・炭鉱、土木工事、軍需工場での強制労働に従事させられました。関東地方でも常磐炭鉱、相模湖ダム建設工事、日本鋼管（川崎）で強制労働させられた朝鮮人労働者たちがいました。この展示では、苦難に遭った、あるいは苦難に耐えて闘った朝鮮人の声を、少しでも聞くことに心がけていました。その声を聞いて、私たち自身の無知無感を改め、少しでも自分の人間性を取り戻しながら、政府が事実を自ら調査し、謝罪・補償をするように、みんなで働きかけていきたいと願って開かれたものです。

「浮島丸事件と日本の戦後責任―隣人への信義を守れ」が2009年1月14日～3月22日の会期で開催されました。戦争終結直後の8月24日午後5時頃、京都府舞鶴湾で、海軍輸送艦・浮島丸が爆発・沈没しました。この船には、帰国する朝鮮人約4000人が乗っていました。浜にいた漁師たちがすぐに救助にむかいましたが、幼い子供を含む500人以上の人びとがなくなりました。日本政府は、日本人乗組員の死傷者には補償しましたが、韓国人には何の補償もしませんでした。1992年～1994年、生還者と遺族たち80人が陳謝と賠償、遺骨返還を求めて、裁判を起こしました。裁判は負けましたが、いろいろなことがわかってきました。地元では1954年から毎年、追悼会が開かれています。

関連して、講演会が開かれました。第1回は2009年2月7日に、青柳敦子さん（朝鮮人徴兵・徴用に対する日本の戦後責任を求める会 代表）が「浮島丸事件と全承烈さん―遺族との和解へ向けて」と、小林喜平さん（朝鮮人戦争犠牲者追悼会 世話人）「祐天寺における市民の追悼会 20年の歩み」とを、第2回は2009年3月7日に青柳敦子さんが「記録から読み解く 浮島丸事件と戦後補償問題の実像」をそれぞれ講演しました。講演後に「恨の海」（青森放送制作ドキュメンタリービデオ）を上映しました。

「民族教育の今を考える―朝鮮学校を中心に」が2009年3月25日～7月5日の会期で開催されました。日本

の敗戦後、朝鮮の人たちはみな朝鮮に帰ろうとしました。日本で生まれ育った子どもたちは、朝鮮の言葉と文化を奪われていましたので、解放後すぐに日本各地に朝鮮学校が作られました。その後、朝鮮学校は今に至るまで、日本政府や日本社会から、弾圧と差別を受け続けて来ました。今は国際化が進み、インターナショナルスクールのほかブラジル人学校なども存在し、日本は共生社会とは言いながらもまだ、民族教育は多くの課題を抱えています。日本社会ではあまり知られていない朝鮮学校を中心に、民族教育の歴史と現状を、パネル展示したものです。図録を刊行しています。

関連して、2009年3月28日に講演会が開かれました。高柳俊男さん（法政大学国際文化学部教授）が「枝川町の歴史と民族教育」と題して、講演しました。講演に先立ち、映画『朝鮮の子』を上映しました。これは1955年2月に枝川朝鮮学校を中心に制作されたドキュメンタリー映画です。

Tel& Fax:03-5272-3510

<http://www.40net.jp/~kourai/>

葛飾区郷土と天文の博物館：東京

博物館ボランティア「葛飾探検団」が2009年3月7日に「東京大空襲と葛飾・柴又山本亭防空壕跡の見学会」をおこないました。防空壕の見学とともに葛飾における空襲の被害や金町で作られていた戦闘機などについての話もありました。

Tel: 03-3838-1101 Fax:03-5680-0849

<http://www.city.katsushika.lg.jp/museum/index.html>

墨田区立すみだ郷土文化資料館：東京

企画展「東京大空襲一個の記憶・町の記憶」が2009年7月4日～9月23日の会期により開催されています。すみだの資料館は、空襲体験者個人の記憶と声を掘り起こし、全体史的認識を相対化することをしてきました。しかし、個人も社会的側面、所属していた家族・社会集団・町に規定されています。この企画展は社会集団の実態を復元し、個人の空襲記憶がそれに如何に規定されているかを解明するものです。展示構成は、記録からたどる町の歴史、個の記憶からたどる町の姿、町の空襲被害とその後、個の記憶と町の記憶などです。

Tel: 03-5619-7034 Fax:03-3625-3431

http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryoku/kyoudo_bunka/index.html

豊島区立郷土資料館：東京

「夏の収蔵資料展&第4回新池袋モンパルナス西口ま

ちかど回遊美術館協力展示」が2009年7月4日～10月4日の会期で開催されています。夏という季節に沿ったさまざまなテーマで収蔵資料を展示しています。その中で、「アトリエ村の作家展」（8月5日まで）（第4回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館協力展示）では、杉浦茂「池袋空襲」、高山良策「池袋駅東口」などを展示しています。「空襲記録写真と区民生活」では、第二次世界大戦末期、空襲によって豊島区も約3分の2が焼失しました。区内が撮影された空襲記録写真を区民生活に関連する資料とともに展示しています。「戦後の区民生活とヤミ市」では、戦後の物資の少ない時代に用いられていた生活用品や、ヤミ市（連鎖商店街）の写真などを展示しています。

Tel:03-3980-2351 Fax:03-3980-5271

<http://www.museum.toshima.tokyo.jp/top.html>

昭和館：東京・千代田区

「ワーナー・ビショフ写真展」が3階特別企画展会場で2009年2月28日～4月19日の会期により開催されました。スイス・チューリッヒ出身のワーナー・ビショフ（1916-1954）はマグナム会員の写真家で、ロバート・キャパとも親交があり、世界中で撮影した多くの写真を残しています。1951年7月に来日した彼は、1952年まで日本で過ごしていますが、日本滞在中にも韓国や沖縄などにマグナムの戦争特派員として派遣されています。1953年には日本についての写真集を手がけていましたが、1954年5月16日、ペルーでの撮影旅行中、アンデスの谷間に墜落し亡くなり、写真集『Japon』は彼の没後に刊行されています。本展では写真家、ジャーナリストとして来日した彼が、戦後の混乱期が過ぎ、新しい時代に向かおうとしているさまざまな日本を捉えた作品を紹介していました。また『Japon』に掲載された作品と、滞在中に撮影した未発表作品の中から厳選した60点の他、ビショフが愛用したカメラや日本についてのレポート等も出品していました。図録を刊行しています。

1階ロビーで、図書資料や映像・写真資料の一部を随時紹介しています。第14回の「東京の空襲—石川光陽撮影写真より」は2009年2月1日～3月20日の会期で開催されました。東京の空襲は1944年11月下旬から激しさを増し、連日のように続きました。1945年2月25日、3月4日、3月10日の空襲は激しく、特に3月10日未明の空襲は「東京大空襲」と呼ばれ、約10万人の死者と多くの罹災者が出たことで知られています。「東京大空襲」とそれを撮影した警視庁のカメラマン・石川光陽（本名 石川武雄）をテーマにしたテレビドラマが2008年3月に放映されました。今回は、その石川光陽が撮った写真の中から、空襲での被災の様子を、64年前の悲しい出来事の一部を紹介していました。石川光陽撮影の写

真は浅草区（現台東区）雷門 2 丁目付近の焼跡（1945 年 2 月 25 日）、炎上中の神田税務署（1945 年 2 月 25 日）、猛火を吐く内閣印刷局（1945 年 2 月 25 日）、本郷区駒込林町（現文京区千駄木）190 番地先の被爆現場（1945 年 3 月 4 日）、本郷区駒込林町（現文京区千駄木）6 番地先被爆現場（1945 年 3 月 4 日）、猛火に追われて避難する戦災者（1945 年 3 月 10 日）、浅草区役所（現台東区西浅草）付近の焼跡（1945 年 3 月 10 日）、西に東に流れていく罹災者（浅草雷門前にて）（1945 年 3 月 10 日）、焼失せる麴町区（現千代田区）富士見町付近（1945 年 3 月 11 日）などを展示していました。映像は 1945 年 9 月アメリカ軍が撮影した「東京の空襲被害」を上映していました。

映像・写真・雑誌展「映像と写真・雑誌にみる戦前から戦後の日本」が 3 階特別企画展会場で 2009 年 4 月 25 日～5 月 10 日の会期により開催されました。今回は、近年新たに入手した戦前の子どもニュース映画と、戦中戦後をテーマとした劇場映画（ビデオ）の上映、資料公開コーナーにおいて展示してきた写真や雑誌資料を公開することでこれまでの総集編として、開館 10 周年を記念するものでした。戦前の子どもニュース映画は「アサヒホームグラフ」や「アサヒコドモグラフ」などを紹介していました。写真資料は石川光陽撮影の写真とアメリカ国立公文書館提供の写真を中心に、戦前から戦後の日本の様子や当時の人びとの姿をとらえたものを紹介していました。雑誌資料は、当時の子どもたちに大人気だった「少年倶楽部」や「少女倶楽部」、女性誌の草分け的存在であった「主婦の友」、野球少年が夢中で見入った「ベースボールマガジン」などの雑誌を紹介していました。戦中戦後をテーマとした劇映画（ビデオ）も上映しました。1 週目（4 月 25 日～5 月 2 日）は、吉永小百合さん主演の「あゝひめゆりの塔」（1968 年・日活）でした。これは、住民を巻き込んだ悲惨な地上戦がおこなわれた沖縄で、日々悪くなる戦況の中、特志看護婦として召集された女子学生たち、「ひめゆり部隊」の悲劇を描いた大作です。2 週目（5 月 3 日～5 月 10 日）は、長編アニメーション「はだしのゲン」（1982 年・中沢啓治製作）でした。子どもたちにも広く知られている中沢啓治さんの同名の劇画をアニメ映画化したもので、戦時下の広島で家族と暮らしていた少年ゲンが、1945 年 8 月 6 日に投下された原子爆弾によって一瞬にして破壊された広島で、家族を失いながらもたくましく生きる物語です。

Tel:03-3222-2577 Fax:03-3222-2575

<http://www.showakan.go.jp/>

早稲田大学津八一記念博物館：東京・新宿区

早稲田大学大学史資料センターの 2009 年度春季企画展「最後の早慶戦—3 番レフト近藤清 24 年の生涯」が会

津八一記念博物館の企画展示室で 2009 年 3 月 25 日～4 月 25 日の会期で開催されました。早稲田大学大学史資料センター・慶応義塾福沢研究センター共編『1943 年晩秋 最後の早慶戦』（教育評論社）の刊行を記念した企画展で、学徒出陣を前に開催された「最後の早慶戦」に関する資料を展示しました。この試合にまつわる関係資料や写真から当日の様態を再現するとともに、この試合に 3 番レフトで出場し、特攻により戦死した近藤清に焦点をあて、戦争と学生について考えるものでした。図録を刊行しています。

企画展「戦争画の相貌—花岡万舟連作」が企画展示室で 2009 年 6 月 15 日～7 月 11 日の会期により開催されました。2006 年度に住野重樹さんより寄贈を受けた花岡万舟の戦争画連作のうち、修復を了えたほぼ半数（25 点程度）を展示しました。中国戦線での戦闘や行軍を描いた絵がほとんどです。戦争画の展示をあえて試みたのは、その隠匿が、過去の事実そのものをも覆いかくし、イメージ資料が伝えるリアリティーを希薄化し、それを歴史考察の対象外に追いやる危険性を孕んでいるからと考えたからです。図録を刊行しています。

Tel:03-5286-3835 Fax:03-5286-1812

<http://www.waseda.jp/aizu/index-j.html>

調布市郷土博物館：東京

調布市では、戦争を体験した市民が年々少なくなる中、体験者の労苦を次の世代へ伝えるために、戦争体験の記録集を発行することとしました。市報で協力を呼びかけたところ、35 名から体験記が投稿されました。この体験を収録した記録集『いまも心に—戦争体験を次の世代へ』が郷土博物館の編集により 2009 年 3 月 23 日に発行されました。構成は、戦時下の調布／「少国民」たち／学び舎から軍需工場へ／戦火の中の女性たち／航空要員として戦地で、飛行場で／長崎と広島／で、巻末には、資料として調布市域の空襲、年表と用語解説、参考文献が付いています。調布市域の空襲は古橋研一さん（郷土史）が執筆しました。

Tel:042-481-7656 Fax:042-481-7655

<http://www.city.chofu.tokyo.jp/www/contents/1176118850606/index.html>

八王子市郷土資料館：東京

コーナー展「故郷から戦地へ—戦場へ向かった男たち」が 2009 年 7 月 10 日～8 月 30 日の会期で開催されています。1931 年の満州事変以降、日本は 15 年間に及ぶ戦争の時代を経験しました。その間、戦闘の舞台は中国から東南アジア、そして太平洋へと広がり、多くの人びとが戦地へと赴いていきました。八王子に残された「兵

士」・「出征」に関わる資料を展示・紹介しています。

Tel:042-622-8939 Fax:042-627-5919

<http://homepage3.nifty.com/hachioji-city-museum/>

福生市郷土資料室：東京

企画展示「平和のための戦争資料展」が2009年6月27日～9月27日の会期で開催されています。太平洋戦争後60年を過ぎた現在、戦争の記憶は薄れつつあります。福生市郷土資料室では8月15日の終戦の日にあわせて戦争関連の資料を展示し、福生と戦争の歴史について考えてきました。今回の企画展示でも近代戦争の始まりである日清戦争から、太平洋戦争までの歴史を、福生地域の郷土資料を通じて紹介しています。現在の尊い平和についてもう一度見つめ直してもらうために開かれるものです。

Tel: 042-530-1120 Fax : 042-552-1722

<http://www.museum.fussa.tokyo.jp/event/03.html>

地球市民かながわプラザ：横浜市

「第15回カナガワビエンナーレ国際児童画展」が企画展示室で2009年7月4日～26日の会期により開かれました。今回は海外84か国1地域と日本国内より合計20723点とたくさんの応募があり、審査の結果入賞した520点の作品を展示していました。

Tel:045-896-2121 Fax:045-896-2299

<http://www.k-i-a.or.jp/plaza/>

川崎市平和館：神奈川

2008年度第2回企画展「戦争体験を記録する」が2009年2月21日～3月13日の会期により開催されました。市内の高校生による戦争体験者へのインタビュービデオの上映や戦災記録写真や戦争中の生活用品などを展示していました。

「川崎大空襲記録展」が1階平和の広場で2009年3月20日～5月6日の会期で開催されました。およそ1000人の死者を出した1945年4月15日の川崎大空襲からまもなく64年になるのを前に、当時の記憶を風化させることなく、次の世代につないでいき、川崎でも空襲で多くの尊い命が失われたことを知ってもらい、戦争の悲惨さを伝え、平和について考えてもらう趣旨で開かれたものです。写真パネルは25点が展示され、重化学工場が集中し、被害の大きかった現在の川崎区の写真が大半で、JRや京急川崎駅周辺が焼け野原となった状況などを伝えていました。また、バケツリレー訓練など、戦下に暮らす人びとの姿も紹介されました。B29爆撃機から投下された焼い弾や、当時の暮らしを伝える資料も並び、

不足していた金属の代わりに陶器でつくられたガスコンロや1000人の女性が布に一針ずつ赤い糸を縫い付けた「千人針」など約80点の資料も展示されました。

Tel: 044-433-0171 Fax:044-433-0232

<http://www.city.kawasaki.jp/25/25heiwa/home/heiwa.htm>

長岡戦災資料館：新潟

『語り継ぎたい長岡空襲—長岡戦災資料館5周年のあゆみ』が2009年3月31日に刊行されました。資料館の創設経緯、5年間の資料館が取り組んだ、体験画の募集・展示・画集刊行、体験記録集の刊行、記映像作成などの事業を紹介しています。

Tel:0258-36-3269 Fax:0258-36-3335

<http://www.city.nagaoka.niigata.jp/kurashi/sensai/siryoukan.html>

ゆきのした史料館：福井

「ゆきのした史料館」は、ゆきのした文化協会が約50年にわたって収集してきた資・史料を多くの人に公開することで、庶民の視点から見た、ありのままの歴史や生活、そこから浮かび上がる真実を発見してもらおうと、2001年11月23日に開設されました。有志のボランティアによる民営型の博物館です。

所蔵史料は当協会の運動に賛同した方からの寄付によって集められたもので、いずれも庶民の生活の足跡を探る上で欠くことのできない貴重な財産です。「史料館だより」はゆきのした文化協会発行の「ゆきのした」に含まれています。福井空襲の貴重な資料だけでなく、文学、文化、原発問題など幅広い資料がたくさん保管されています。

来館の問い合わせ先は次の通りです。

福井県坂井市丸岡町里丸岡1-23

代表：田島伸浩氏

Tel&Fax:0776-52-2169

info@yukinoshita.net

<http://www.yukonoshita.net/>

長野県立歴史館：千曲市

信州ふれあい講座で2009年1月24日に原明芳さんが「長野県の戦争遺跡—陸軍墓地をめぐる」を講義しました。

Tel: 026-274-2000 Fax:026-274-3996

<http://www.npmh.net/>

静岡平和資料センター：静岡市

「静岡市民が遺した戦争資料展第2部―戦地へ送られた静岡市民たち」が2008年12月5日～2009年5月31日の会期で開催されました。戦地へ送られた静岡市民の遺書、遺品、戦地からの手紙、写真などが展示されました。

「静岡市民が遺した戦争資料展第3部―戦中・戦後の暮らし」が2009年6月12日～11月22日の会期で開催されています。

「生き残り兵士の証言」を聞くつどいが、2009年3月15日に静岡市中央福祉センター3階大会議室で開かれました。証言者は静岡歩兵第34連隊の元兵士の方たちでした。

Tel:054-247-9641 Fax:054-247-9641

<http://homepage2.nifty.com/shizuoka-heiwa/>

戦争と平和の資料館・ピースあいち：愛知・名古屋市

第五福竜丸展示館の協力により「第五福竜丸展」が2009年2月24日～4月11日の会期で開催されました。ここでは解説パネルとともに死の灰、ガイガーカウンター、愛知における新聞報道記事などを展示していました。関連して、第五福竜丸展示館の安田和也さんの講演が3月7日に、第五福竜丸元乗組員大石又七さんの講演が3月10日に、それぞれおこなわれました。

ピースあいち開館2周年記念特別展「教科書にみる戦争と平和」が2009年5月12日～7月11日の会期で開催されました。これは教科書が時代とともにどのような内容になっていったかを、教科書などの実物資料と解説でたどったものです。CD版の図録を作成しています。

Tel&Fax:052-602-4222

<http://www.peace-aichi.com/index.html>

桜ヶ丘ミュージアム：愛知・豊川市

豊川市郷土資料展示室で「豊川海軍工廠展」が2009年7月18日～8月30日の会期により開催されています。桜ヶ丘ミュージアムでは、豊川海軍工廠の歴史や戦争について知り、私たちの街にもあった戦争について考えてもらおうと、毎年夏の時期に「豊川海軍工廠展」を開催しています。豊川海軍工廠は、海軍兵器の生産を目的として1938年に旧宝飯郡豊川町・牛久保町・八幡村にまたがって建設することが決定され、1939年12月15日に開庁しました。機銃及び弾丸や艦船で使用する測距儀、双眼鏡、射撃装置などを生産し、機銃の生産に関しては日本最大の規模でした。工廠の発展は、人口の増加や各町村の結びつきを強めることとなり、豊川市の誕生・発展に大きな影響を与えました。しかし、1945年8月7日のアメリカ軍B29爆撃機124機などの空襲により壊

滅的な被害を受け、2500人以上の人が犠牲となりました。本展では、当館が収蔵する海軍工廠の生産品・工具・生活用品などの資料に加え、写真資料や絵画資料も展示しています。

Tel:0533-85-3775 Fax:0533-85-3776

<http://www.city.toyokawa.lg.jp/tanto/bunka/museum.html>

四日市市立博物館：三重

学習支援展示「四日市空襲と戦時下の暮らし」が2009年6月13日～8月30日の会期で開催されています。平和学習の支援を目的に、四日市が空襲に遭ったことや戦時中の暮らしのようすを実物資料や写真パネル・模型などで紹介しています。

Tel:059-355-2700 Fax:059-355-2704

<http://www.city.yokkaichi.mie.jp/museum/>

大津市歴史博物館：滋賀

第49回企画展「戦争と市民」が2009年7月25日～8月30日の会期により開催されています。大津市は今から60年程前まで、大津連隊区司令部、大津海軍航空隊、滋賀海軍航空隊、陸軍少年飛行兵学校、天虎飛行研究所、比叡山上の特攻基地など、軍の関係施設が設置されました。本展では、1875年の陸軍歩兵第九連隊の設置から説き起こし、第二次世界大戦、さらには戦後の進駐軍時代に至る、大津にとっての戦争の歴史を紹介しています。特に、軍事施設のありさまや、「銃後」と呼ばれた内地の市民生活に焦点を当て、その変遷を、残された資料や写真パネルなどによって振り返っています。

Tel:077-554-2733 Fax:077-554-2755

<http://www2.city.ritto.shiga.jp/hakubutsukan>

東近江市能登川博物館：滋賀

東近江市平和祈念展2009!“もう二度と過ちを繰り返さないために・・・”「学ぼう湖国の戦争のことーみんな語り継いでいくために」が滋賀県・東近江市などの共催により、東近江市能登川博物館の展示室とギャラリーを使って、2009年6月24日～7月19日の会期で開催されました。開催趣旨は県民から提供された戦争や戦争中の暮らしに関する資料などを広く紹介し、県民一人ひとりが戦争の悲惨さと平和の尊さを学び、平和な世界について考えていくための機会を提供することでした。戦争当時の子供たちが描いた絵や絵日記、戦地にいる兵士から銃後の家族のもとへ送られた手紙、戦地や捕虜収容所で書かれた日記、赤紙を届けた兵事係が隠し残した資料とその兵事係の体験談、八日市飛行場、県内3カ所に

設けられた捕虜収容所に関する資料や写真、八日市飛行場の特攻隊員の寄宿先であった八紘荘での暮らしの再現、東近江市戦没者の個人史、県内の小・中学生が平和を願って描いた絵やメッセージ、東近江市の小・中・高生による平和をテーマにした作品、「ピースメイキングプロセス 2009 若者たちのメッセージ」、絵本作家 西村繁男さんの「はらっぱ 戦争・大空襲・戦後・・・いま」の原画などが展示されました。

関連して平和学習やワークショップもありました。

東近江市内の沖縄三線グループによる「心（くる）」による沖縄三線コンサートが能登川図書館集会ホールで7月4日に開かれました。

ワークショップ「紙芝居をつくろう」が能登川図書館集会ホールで7月11日に開かれ、プロの紙芝居師と一緒に平和の紙芝居をつくりました。

西村繁男さんの講演会「絵本と平和あれこれ」が能登川図書館集会ホールで7月12日に開かれ、「はらっぱ」「絵で読む広島原爆」「もうひとつの日本の歴史」などの自作絵本を中心に戦争、平和について語りました。

市内戦跡めぐりが8月16日に開かれます。

Tel:0748-42-6761

<http://www.town.notogawa.shiga.jp/>

舞鶴引揚記念館：京都

「舞鶴・引揚語りの会」の企画制作による、2008年度第4回企画展「バム鉄道建設とシベリア抑留」が企画展示室で2009年2月1日～4月20日の会期により開催されました。極東とモスクワ・ヨーロッパを結ぶ“第二シベリア鉄道”といわれる「バム鉄道(ソフガワニ～タイシエツト)」。この鉄道建設にはシベリア抑留者の苦難の歴史があります。第4回企画展では、シベリア開発の基幹となる交通手段の建設の実態に視点をあて、「画文集『シベリア抑留 1450 日』記憶のフィルムを再現する 画・文 山下静夫(2007年 東京堂出版・デジプロ発行)」から展示しています。

「舞鶴・引揚語りの会」の企画制作による、企画展「安田清一『絵本シベリア物語』」が企画展示室で2009年4月25日～7月31日の会期により開催されました。シベリア抑留中、ソ連政治部将校からイルクーツクのメーデーのスケッチ取材に出張するよう命じられ、粗末なスケッチブック2冊と水彩絵具等を支給されました。この画材用具で描いた街の様子など、引き揚げ時に没収されなかった貴重な水彩画などを展示しました。

Tel:0773-68-0836 Fax:0773-68-0370

<http://www.maizuru-bunkajigyoudan.or.jp>

立命館大学国際平和ミュージアム：京都市

岡部伊都子回顧展が中野記念ホールで2009年4月28日～5月31日の会期で開催されました。2008年4月に85歳で亡くなった岡部伊都子は、20世紀後半の日本を代表する随筆家の一人でした。花鳥風月から戦争・沖縄・差別・環境問題へと、多岐にわたり細やかな視線で人間性を追及し、常に人びとを惹きつけました。本展覧会では、少女時代の原稿や、箏、琴、鏡台など、彼女が最後まで愛し、さまざまな思いを込めて残した品々を展示し、モノを通して思いを伝えること、モノとともに思いが伝わることを意味を問いかけました。婚約者や戦死した兄の遺品など、岡部伊都子の平和への願いの原点となった資料もあわせて展示しました。

第41回ミニ企画展示、成人式関連展示が2階ミニ企画展示室で、2009年1月10日～2月1日の会期で開催されました。現在のような成人式の式典がおこなわれるようになったのは、第二次世界大戦後です。それまではどのような成人儀礼がおこなわれていたのか、成人になるとどのようなことがあるのか、成人式にまつわるあれこれを、パネルで紹介しました。

緊急ミニ展示(第42回)「ガザの悲劇」が2009年1月9日～2月15日の会期で開催されました。イスラエルとパレスチナは、1948年のイスラエル建国以来、長年にわたって対立してきました。2008年12月末から2009年1月にかけて、ガザ地区のハマスと呼ばれる武装組織とイスラエル軍との間で戦闘が始まり、多数の一般住民の被害をもたらす悲惨な状況に陥りました。紛争当事者にはそれぞれの言い分がありますが、その狭間にあつて、子どもたちを含む一般市民の命が奪われることがあつてはならないでしょう。いま、国際社会で、「即時停戦と和平に向けての努力の再開を求める声」がますます強くなっています。私たちに何ができるかを考えるため、緊急展示が開催されました。この展示は、その後、高知県・広島県・長野県などに巡回されています。

第43回ミニ企画展示「とんとんとんからりと隣組：調べてみよう、戦時中の京都の生活」が2階ミニ企画展示室で、2009年2月5日～3月1日の会期で開催されました。隣組とは、戦時体制において、国民生活の基盤となった隣保組織のことです。1940年より各地で組織され、戦争での住民の動員や物資の供出、統制物の配給、空襲での防空活動などをおこないました。特に京都の隣組に焦点を当て、当時の隣組の活動で使われた資料を展示し、戦争中の隣組の性格や役割などを紹介していました。

第44回ミニ企画展示「アーサー・シイク展」が2階ミニ企画展示室で、2009年3月5日～28日の会期で開催されました。ポーランド生まれのユダヤ人画家であるアーサー・シイクは、これまでほとんど日本では知られていませんでした。細密画の名手としてパリで活躍したシイクは、第二次大戦が始まり、ナチスによるユダヤ人

弾圧が過酷になったため、アメリカに亡命し、以後、活躍の舞台をアメリカに移すことになりました。アメリカでは、週刊誌や新聞紙上にナチスや日本の指導者などをからかう風刺画を次々と発表し、その人気を高めました。ヒットラー、ムッソリーニ、ヒロヒトなど全体主義国家のリーダーたちを描く筆致は、まことに鋭く、シイクは絵筆をもって彼らを刺したといっただいでしょう。いま日本では、第二次大戦中に日本軍が犯した罪を忘れようとし、過去を反省することを自虐史観として退けようとする風潮があります。シイクが描いた醜い日本人を直視することは、アジア諸国に対して日本が犯した罪を、改めて確認することにつながるのです。本展では、彼が描いた風刺画の内容を紹介し、シイクの戦争に対する鋭いまなざしをとらえていました。

第45回ミニ企画展示「発掘された京都の武器2ー第16師団が埋めた武器」が2階ミニ企画展示室で、2009年4月1日～17日の会期で開催されました。2008年、第16師団跡地の発掘調査がおこなわれ、曲げて捨てられた武器が出土しました。2007年のミニ企画展示「知らなかった京都の戦争」で紹介した京都市内の小学校の校庭から出土した武器も、曲げて捨てられていました。今回の発掘調査から、師団も武器の廃棄をおこなっていたこと、小学校の武器廃棄は民間人が独自におこなったものではなく師団と関連していた可能性があることが分かりました。本展では、2008年の発掘調査の状況を、前回の出土状況と比較しながら紹介していました。また、実際に出土した軽機関銃や火炎放射器など、武器類の生々しい資料を展示していました。

第46回ミニ企画展示「No war No base 観光では見ることができない沖縄・韓国」が2階ミニ企画展示室で、2009年4月25日～5月17日の会期で開催されました。この展示では、婦人国際自由連盟の立命館大学の学生支部が、沖縄スタディ・ツアーを通して学んだ、「本土」からは見えにくい沖縄の米軍基地問題について紹介しました。沖縄に米軍基地が建設された歴史、米軍のリクルート制度、米兵による性暴力、環境汚染、基地と経済・雇用などについて取り上げ、米軍基地があることによって生じるさまざまな問題や米軍基地と隣り合わせの生活を送る沖縄の人びとの思いを紹介していました。また、韓国の米軍基地周辺の女性に対する暴力についても、あわせて展示していました。

第47回ミニ企画展示「友禅図案（絵摺り）に描かれた『韓国併合』」が2階ミニ企画展示室で、2009年5月23日～6月21日の会期で開催されました。友禅染や西陣織は京都を代表する染物です。その設計図である「図案」の中には戦争や植民地支配に関連する図案もありました。こうした図案からは、「銃後」におけるもう一つの戦争・植民地支配の姿が見えてきます。本展では、明治末～大正期当時に流行した友禅図案を紹介すると共に、

「日韓併合」記念図案を展示していました。近代化の影響を大きく受け発展した伝統工芸が如何に当時の世相と関わっていたか、伝統工芸が如何に当時の世相を受け止めていたのか、今日から見れば異質に映る伝統工芸の側面を紹介していました。

関連して、シンポジウム「友禅図案（絵摺り）に描かれた『韓国併合』」が2階ミュージアム会議室で2009年5月30日に開かれました。

第48回ミニ企画展示「経帷子の織人ーローズマリー・コーツィー展」が2階ミニ企画展示室で、2009年6月27日～7月26日の会期で開催されました。今展では、ローズマリー・コーツィーが描いた素描、パステル画25点、コーツィーの手記などを展示していました。コーツィーは、1939年にユダヤ人の両親のもと、ドイツに生まれました。ナチのユダヤ人等への絶滅政策のために1942年に母親とともに強制収容所に入れられました。その後、フランスの収容所に一人で移送され、4歳から6歳の間、「死」と隣り合わせの過酷な労働環境におかれました。解放後も、家族の離散や孤児院での厳しい生活が待っており、心身の調子を崩しましたが、この頃、修道女から水彩画の手ほどきを受け、やがてジュネーブの装飾美術学校に進み、繊維造形の気鋭作家として成功を収めました。一方生涯に渡り、脳裏から片時も離れることのないナチ収容所の様子を描き続け、犠牲者たちの死を悼みました。生涯で一万数千点にもものぼる素描には、「わたしはあなたに経帷子を織ってあげる」という言葉が記されています。幼少期の悲惨な体験を源泉とした繊細な描線によって紡がれた彼女の作品は、見る者の心に鋭く深く突き刺さります。

また、この間、ガザ問題について2回、北朝鮮核実験問題、アメリカのホロコースト記念館での黒人職員射殺事件（下に紹介）などについて館長・名誉館長共同声明が発表されました。

「アメリカのホロコースト博物館での 黒人警備員射殺事件についての声明」

2009年6月10日、アメリカの首都ワシントンのユダヤ人虐殺問題に関する「ホロコースト記念博物館」で、黒人警備員が白人至上主義者に射殺される事件が起きました。犯人は、黒人やユダヤ人に対する憎しみを露わにしており、「ユダヤ人虐殺問題の展示施設を警備する黒人」を狙った意図的な犯行ではないかと見られています。

アメリカ史上初めて非白人系大統領が登場し、「反ユダヤ主義と人種的偏見」に対する警戒を国民に呼びかけたばかりですが、アメリカ社会には今なお1000近い人種差別団体があると伝えられており、今回の事件は図らずもそうしたアメリカ社会の断層を垣間見せる結果となりました。

事件があった「ホロコースト記念博物館」は、ヒトラ

一施政下のドイツでのユダヤ人虐殺の非人道性を伝える施設で、1993年の開設以来、毎年約170万人もの人々が訪れています。今回の事件は、今のところ、ジェームズ・フォンブラン容疑者による単独犯行と考えられていますが、同容疑者は、1978年に設立された「歴史再検討研究所 (The Institute for Historical Review)」の一翼を担った反ユダヤ主義者ウイリス・カートの影響を受け、「アメリカ社会の金融はユダヤ人によって支配されている」という狂信的な信念を抱き、自らのウェブサイト上でもホロコーストそのものを否定し、ユダヤ人を「西欧文明の破壊者」と激しく非難していました。私たちは、いかなる歴史観や価値観をもつにせよ、事実は事実としてあるがままに受け止めることが過去に対する誠実な態度であると確信しています。立命館大学国際平和ミュージアムは、「過去と誠実に向き合うこと」を基本的な展示原理とし、日本国民の戦争被害だけでなく、アジア・太平洋地域で日本軍が行なった加害行為についても歴史学の研究の成果に立って展示しています。

私たちは、今回の事件について、以下の2つの点に対する注意を喚起します。

(1) 異なる価値観や歴史観をもつ他者を暴力で抹殺することは絶対に正当化されないこと。

平和的な人間関係を育むためには、可能な限り互いの価値観を理解し合い、認め合うことが不可欠です。異なる価値観をもつ他者の命を奪う行為は、それこそホロコーストを正当化しかねない行為であり、決して容認されてはなりません。

(2) 命の大切さを考える場であるべき「ホロコースト記念博物館」において、有無を言わず命を奪うような暴虐が行われることは絶対に許されてはならないこと。

ホロコースト記念博物館、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、南京虐殺記念館など、人類による大量殺戮を展示する博物館は、生命の尊厳性を来館者に伝える重要な使命をもつ社会教育施設であり、人の命を奪うような行為は強く非難されなければなりません。

私たちは、立命館大学国際平和ミュージアムが、今後とも命のかけがえのなさを訴えかける平和教育の場として、いっそう有効かつ魅力的なものとなるよう努力を重ねるつもりです。

上のとおり声明します。

2009年6月16日

Tel:075-465-8151 Fax:075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp>

大阪国際平和センター(ピースおおさか)：大阪市

特別展『満州国』とシベリア抑留』が1階特別展示室で2009年1月15日～4月29日の会期で開催されました。1931年に「満州」(現中国東北部)の柳条湖で起こ

った鉄道爆破事件をきっかけに、日本軍はその地域の主な都市を制圧し、翌年には清国最後の皇帝溥儀をたて「満州国」を建国しました。そこでは「五族協和」「王道楽土」をスローガンとし、日本政府や新聞は満州を希望の大地のように表現、多くの日本人が満州へ渡って行きました。太平洋戦争末期、日本の敗戦が色濃くなると、1945年8月9日にソ連が対日参戦し満州に攻め入りました。その地に残されていた多くの日本人は、命からがら日本本土へ引揚げてきましたが、投降した日本軍兵士などは帰国することができずに、ソ連のシベリア地域などに強制的に送られ、劣悪な環境の下、労働力として酷使されました。今回の展示では「満州国」とシベリア抑留に焦点をあて、当時の状況について紹介していました。展示概要は、1.満州事変以前の中国東北部、明治三七・八年従軍記章、旅順戦跡絵はがき、南満州鉄道株券など、2.満州事変と「満州国」、満州各都市の絵はがき、大満州国建国功労章、満州国紙幣、開拓村の写真、満州国地図 など、3.ソ連の参戦と本土への引揚、引揚証明書、引揚時に使用した背負い袋など、4.シベリア抑留、抑留者の体験画(複製)、収容所で作られたカバンとスプーン、飯盒、収容所の写真などで、全部約100点を展示していました。

特別展「第五福竜丸-ビキニ水爆実験から55年」が東京都立第五福竜丸展示館の協力をえて1階特別展示室で2009年5月14日～9月20日の会期により開催されています。1954年3月1日未明、第五福竜丸(遠洋マグロ漁船)は太平洋のビキニ環礁沖で、アメリカの水爆実験により被爆しました。船は放射能を大量に含んだ「死の灰」を浴び、乗組員23名全員が被爆し、半年後に無線長の久保山愛吉さんが亡くなりました。今回の特別展では第五福竜丸の被災を中心に、現地周辺の島民の被害も含めて、パネルおよび現物資料で紹介し、核兵器の非人道性と平和の尊さについて考えるものです。展示概要はビキニ水爆実験被害の実相や戦後の核兵器の状況などについて、わかりやすく説明したパネルなど写真・文字パネル(約80点)と、「船内で採取された死の灰」「漁具」などの現物資料(約60点)です。

ピースセミナー「平和創造の方法を共に考えるワークショップ-子どもたちに平和をどう伝えるか」が1階講堂で2009年2月8日に開かれました。講師は大阪女学院大学准教授奥本京子さんら、トランセンド研究会会員の方たちでした。21世紀に入った今もなお世界各地で紛争が武力化し、子どもや女性など罪のない人びとが犠牲になっています。こうした紛争を力で解決するのではなく、当事者どうしが互いの立場を主張しながら納得できる平和的な解決方法を見出すことが重要です。このセミナーでは、ワークショップ(参加型学習)の手法により、個人の葛藤から国際間の紛争まで問題を多面的かつ正確に捉え、「共感」「非暴力」「創造性」をキーワードに、紛争を対話へと転換・超越し、平和的に解決する方法を学

びました。

3・13 大阪大空襲平和祈念事業講演会「空襲体験の継承—体験者と若者のリレートーク」が1階講堂で2009年3月7日に開かれました。講師は関西大学講師の矢野宏さんでした。第二次世界大戦中、大阪では1945年3月13日の大空襲など50数回の空襲により約1万5千人の犠牲者を含む多大な被害を受けました。64年が経過し、空襲・戦争体験者の高齢化が進む今日、一人ひとりの鮮烈な「記憶」を「記録」として残す取組みを通して戦争の実相を伝えて行くことが大切です。戦争を体験した世代は次の世代にどう伝えていけばよいのでしょうか。一方、若者たちは、体験者からどう聞き取り学んでいけばよいのでしょうか。空襲体験を語る活動を続けてこられた方がたと体験者からの聞き取り活動を実践されている大学生たちとともに、体験の伝え方・聞き取り方について学びながら、戦争の悲惨さと平和の尊さについて考える機会とするために開かれました。

ピースおおさか「ウィークエンド・シネマ」が1階講堂で毎月開かれています。開催趣旨は、ピースおおさかで所蔵する戦争や平和の映像資料を広く鑑賞する機会を提供し、平和な世の中を子どもたちに引き継いでいく方法を一緒に考えるためです。

1月の「ウィークエンド・シネマ」は、2009年1月10日、11日に、学徒出陣し学業半ばにして戦地へ向かっていた学生たちの行動、その生と死を描いた、1995年の出目昌伸監督の「きけ、わだつみの声」を、17日、18日、24日、25日には、野間宏が大阪の部隊での自らの体験を書いた長編小説を、山本薩夫監督が映画化し、日本軍の内務班という閉鎖社会の中での人間模様を通して、反戦のメッセージを伝えた、「真空地帯」をそれぞれ上映しました。

2月の「ウィークエンド・シネマ」は、2009年2月1日、7日、14日は、沖縄戦での壮絶な攻防戦下における“姫ゆり部隊”の乙女たちの献身的な働きを描いた「太平洋戦争と 姫ゆり部隊」(前編)を、15日、21日、22日は“姫ゆり部隊”乙女たちの悲しい結末を描いた「太平洋戦争と 姫ゆり部隊」(後編)をそれぞれ上映しました。

3月の「ウィークエンド・シネマ」は2009年3月1日、8日、14日、15日は、東京大空襲を描いた今井正監督、工藤夕貴主演の「戦争と青春」を、22日、28日、29日は、原爆投下のわずか3日後、自らも傷つきながら車掌として広島街に路面電車を走らせた女学生たちの物語、アニメ「ヒロシマに一番電車が走った」と、竹山道雄原作で、ビルマで堅琴の名手の兵隊が僧侶となって日本兵の霊を弔っていたことを描いた「ビルマの堅琴」とをそれぞれ上映しました。

4月の「ウィークエンド・シネマ」は2009年4月4日、11日、18日、25日に「満州国」建国以後の中国・

奉天(現瀋陽)を舞台に、日本の建築会社の支社に赴任した男と、現地に住む同じ会社の女性(李香蘭)や支店長の娘(木暮)がくりひろげる青春物語、李香蘭主演の1942年作品「迎春花」を上映しました。

5月の「ウィークエンド・シネマ」は2009年5月2日、9日、16日、23日に、7人の息子の出征後、無事を祈って7本の木を植えた母親の愛を通して戦争の悲惨さと平和の尊さを訴える、アニメ「おかあさんの木」と、反ユダヤ主義の中、孤児のための教育につくしたコルチャック先生の全人生を証言と収容所の貴重な映像でつづる、ドキュメンタリー「ヤヌシュ・コルチャック すべてをこどものために」とを上映しました。

6月の「ウィークエンド・シネマ」は2009年6月6日、13日、20日、27日に新藤兼人監督・脚本、宇野重吉・乙羽信子主演の「第五福竜丸」を上映しました。

7月の「ウィークエンド・シネマ」は2009年7月4日、11日、18日、25日に、黒木和雄監督、宮沢りえ主演で、家族を広島原爆で失った主人公が自分だけが生き残った負い目をもって生きていて、ひとりの青年に好意を示されたものの、新しい恋に踏み出せないでいる時、父親の幽霊があらわれ、娘の背中を押すことを描いた「父と暮せば」を上映しました。

Tel:06-6947-7208 Fax:06-6943-6080

<http://www.peace-osaka.or.jp/>

吹田市平和祈念資料室：大阪

平和祈念資料室が2009年2月4日から出口町2-1の男女共同参画センター(デュオ)内に移転しました。2階の第1会議室で戦時中の現物資料などの展示をし、毎月、平和映画会を2階の視聴覚室で開催しています。

Tel&Fax:06-6387-2593

<http://www.city.suita.osaka.jp/kobo/jinken/page/000338.shtml>

堺市立平和と人権資料館：大阪

企画展「守ろう!地球 止めよう!温暖化」が2009年1月7日~3月29日の会期により開催されました。今回の企画展は、地球温暖化の現状をパネルで紹介し、「環境を守ることの大切さ」「いのちと平和の大切さ」を訴えるものです。

企画展「堺の戦時下の暮らし」記録写真展が2009年7月1日~8月30日の会期で開催されています。堺市は、第二次世界大戦で、1945年に5回の空襲を受け、人的、物的に多大な被害を被りました。「防空演習」「空襲後の消火活動をする人々」「焼け跡での壕生活」など、戦時下の堺の記録写真を展示しています。

Tel:072-270-8150 Fax:072-270-8159

姫路市平和資料館：兵庫

2008年度 収蔵品展「戦時下の暮らしと姫路空襲」が2階展示室で2009年1月16日～3月31日の会期により開催されました。平和資料館では毎年、市内外の方がたから戦争当時の貴重な資料の寄贈を受けています。その数は現在では、現物資料約5,600点のほか、写真パネル、図書などを含め約9,700点にのぼっており、毎年、テーマを絞って展示しています。今回は、当時の生活と姫路空襲のありようを展示していました。そこにあった何気ない生活とこれを破壊した姫路空襲を見ることで、戦争の悲惨さや平和の尊さについて考えることのできる機会となることを願って開催されたものです。1. 2007年度中に新たに寄贈された資料では、陣中日誌、軍服、水筒など約50点、2. 銃後の暮らしでは、紙芝居、レコード、代用品など約60点、3. 戦地の兵士たちでは、千人針、恩賜のたばこ、遺言状など約40点、4. 資料が語る姫路空襲では、焼夷弾、防空頭巾、空襲前後の空撮写真など約20点、をそれぞれ展示していました。

関連して、2月11日に「姫路空襲を聞く会」が開かれ、高谷日出男さんが話しました。

2009年度春企画展「戦前・戦後の『食』を知り、『食』に学ぶ」が2階展示室で2009年4月10日～7月5日の会期により開催されました。春の企画展では「食」をテーマに、戦前から戦後までの食の歴史を取り上げていました。華やかな戦前から、戦争による食糧事情の悪化、配給制度や、人びとが工夫した献立などを、写真、展示物を交えて紹介していました。また当時の食事情を伝えるべく、戦時中の「食」を参考に実際に作り、写真展示していました。

関連して、5月5日に「姫路空襲体験記朗読会」が開かれ、女優の駒田真紀さんが朗読しました。6月21日には、作家のこちまさこさんの講演会「焦土にそびえる天守閣－姫路空襲からの再出発2」が開かれました。

Tel:0792-91-2525 Fax:0792-91-2526

<http://www.city.himeji.hyogo.jp/heiwasiryu/>

神戸文学館：兵庫

企画展「空襲と文学・神戸」が2009年3月17日～6月5日の会期により開催されました。妹尾河童の「少年H」、野坂昭如の「火垂るの墓」などの神戸空襲を描いた文学作品や市民の記録と写真、地図、焼夷弾などを展示していました。

関連して、記念講演会が開かれ、3月28日には井上修一さんが「父・井上靖の戦争体験」を、4月18日には橋川真一さんが「神戸空襲と文学」を、4月25日に

は大田正紀さんが「大岡昇平文学と戦争」を、5月23日には中田政子さんと光森史孝さんが『神戸空襲を記録する会』の歩みをそれぞれ話しました。

企画展「空襲と文学 PART II 神戸・明石」が2009年6月11日～8月31日の会期により開催されています。作品を一部変え、明石の作品も加えています。

企画展「空襲と文学 part II 神戸・明石」記念講演①が2009年7月7日に開かれ、野田正彰（関西学院大学教授）さんが「空襲被災者の老い」と題して講演し、「空襲の被災者が晩年になって再び昔の極限状況を想起し自責感を強めている」ことなどを語りました。

企画展「空襲と文学 part II 神戸・明石」記念講演②が2009年7月11日に開かれ、岸本進一（元灰谷健次郎事務所主宰）さんが「灰谷健次郎の『太陽の子』を語る」と題して講演しました。「太陽の子」では沖縄戦が背景になっており、また神戸空襲にも言及、「知らなくてはいけないことを、知ろうとしないで過ごしてきた」と登場人物に言わせています。

企画展「空襲と文学 part II 神戸・明石」記念講演③が2009年7月18日に開かれ、「森はな 人と文学」の著者、坂田月代（「ささゆりの会」元会長）さんが「森はな 人と文学」と題して講演しました。

企画展「空襲と文学 part II 神戸・明石」記念講演④が2009年8月8日に開かれ、柏木貴志（重慶大爆撃の被災者と連帯する会会員）さんが「広島・重慶・神戸」と題して講演します。

Tel&Fax:078-882-2028

<http://www.kobe-np.co.jp/info/bungakukan/kannai.html>

奈良県立図書情報館：奈良市

戦争体験文庫企画展示「子どもたちが見た満州 2 満州建設勤労奉仕隊・満豪開拓青少年義勇軍」が2009年1月6日から3月29日の会期により開催されました。シリーズ展示「子どもたちが見た満州」第2回目の本展示では、第1回目の「修学旅行」とは別の形で満州を訪れた子どもたちの姿を紹介していました。満州への修学旅行は、満州事変の勃発により一時期減少しましたが、その後徐々に回復し、毎年200以上の団体、1万人以上の学生が満州を訪れました。当時の満州への団体旅行客の7～8割が修学旅行生だったとされています。日中戦争開始から2年後の1939年、男子高等教育機関では軍事教練が必修になりました。また、勤労奉仕を目的として青年を大陸に派遣する「興亜青年学生勤労報国隊」が文部省により計画され、夏季の1～3か月、1万人の男子学生が満州や中国北部に派遣されました。彼らは軍隊と同じように部隊編成を組み、国内で1～2週間の訓練をしてから、満州に出発、農作業や道路建設などに従事しまし

た。また、これに伴い交通機関の混雑緩和のため、一般の満州旅行が制限されることになりました。報国隊は翌年からは「満州建設勤労奉仕隊」と名前を変え、継続して派遣されました。そしてこの年から、勤労奉仕など戦時体制下の「戦力」保有のため、国内外を問わず、長期間の修学旅行が全面的に禁止されることになりました。こうして、日露戦後から始まった満州修学旅行は、日中戦争長期化とともに「戦力」確保のため、終止符を打たれることになりました。以後、学生たちは修学旅行に代わり「勤労奉仕隊」として満州を訪れることになったのです。主な展示資料は、日本体操(やまとぼたらき)の葉、興亜青年勤労報国隊の歌(譜面)、勤労奉仕隊員衛生心得、興亜青年勤労報国隊奈良中隊参加記、満蒙開拓青少年義勇軍絵葉書、『家の光』1943年10月号、展覧会パンフレット「満蒙を正視せよ」、『写真週報』第93号、開拓民名簿登載一件綴、大東亜大臣宛満州開拓民誓約書、満州農業移住者乗車証、などです。奈良県満州開拓移民関係図表も作成し、展示していました。

戦争体験文庫企画展示「戦争と食べもの 1 米の配給と供出」が2009年4月1日から6月28日の会期により開催されました。2009年度の展示は、「戦争と食べもの」というテーマを設け、太平洋戦争期の食べ物について紹介しています。第1回目の本展示は、「米の配給と供出」と題し、日本人の主食である米を取り上げていました。1938年に国家総動員法が定められた以降、米の流通組織が一元化されるなど、政府は米の統制を強めました。奈良県は、「戦地を偲んで二割の節米」の標語を掲げ、節米運動を展開しました。1941年4月には、米の配給制が実施されました。配給される米は、大人1人あたり2合3勺(約330グラム)に定められ、それぞれの家庭に米穀通帳が配られました。米は、玄米からぬかと胚芽を取り除き、白米となります。配給米は、白米ではありませんでした。米穀搗精等制限令により、米の精白は7分以下に限られ、後に5分以下、2分以下と制限が強まりました。米が不足すると、東南アジアなどから輸入された外米が混ざりました。外米輸入が困難になると、米に麦類、ジャガイモ、サツマイモなどを合わせて配給されるようになりました。終戦直前になると、米の不足が更に深刻となり、1945年7月には、配給量の1割が削減されるまでになりました。米の統制は、消費者だけでなく、米を生産する農家にもおこなわれました。農家が、政府から割りあてられた量の生産物を国に売り渡すことを、供出と言います。農家を作る米は、自家保有米を除く全てが政府に供出されました。また、「食糧の増産こそが、農民に負わされた至上命令である」との檄が飛ばされ、農家には米の増産が求められました。主な展示資料は、家計簿、物資配給購入券保存袋、興亜生活実践運動用(箸袋)、戦時下の主婦のお台所経営の秘訣、家庭重宝ページ、外米の美味しい炊き方と頂き方、『主婦之

友』1941年6月号、『家の光』第19巻11月号、『家の光』第20巻6月号、管理米出荷完遂運動のチラシ、重要農産物増産協議会資料、賞状(米穀増産)、銃を取る気分で堆肥を造れ、などです。

戦争体験文庫企画展示「戦争と食べもの 2 野菜」が2009年7月1日から9月29日の会期により開催されています。第2回目の本展示は、「野菜」と題し、野菜の増産、作地制限、完全利用を取り上げています。1939年に出された価格等統制令によって、戦時中の野菜の値段は、それぞれに決められていました。1941年8月に農林省が青果物配給統制規則を定めると、同年12月に奈良県は奈良県青果物配給統制規則を出し、野菜の統制をおこないました。戦時中は野菜の完全活用が掲げられ、皮、種、茎、枯れ葉、へたなども食べられるようになりました。戦時中に野菜は不足しており、自給自足が呼びかけられました。家庭でも空き地を利用して、トマト、ダイコン、トウモロコシなどを作ることが奨励されました。甘藷は、米、麦と共に主要食糧農作物と位置づけられ、増産のために「甘藷増産数へ歌」が作られました。奈良県は戦前のスイカの生産量日本一を誇っており、「大和西瓜」としてその名声を博していました。しかし、1941年3月に奈良県が農作物作付制限規則を出し、スイカ、まくわ瓜、ながいも、ショウガ、カキ(観賞植物)の生産を制限したことにより、奈良県のスイカ生産量は著しく減少しました。主な展示資料は、空地利用 雑穀と蔬菜を作ろう、重要農産物増産村経済更正委員会審議資料、決戦食糧増産指導者必携(甘藷増産数へ歌)、戦時農園講義録、『主婦之友』1944年7月号「戦う食生活」、トマトの不思議な力、トマトの蜜柑箱栽培法、『週報』392号、『週報』410号、などです。奈良県の野菜統制年表、スイカの統計表も作成し、展示していました。

Tel:0742-34-2111 Fax:0742-34-2777

<http://www.library.pref.nara.jp/sentai/gallery.html>

和歌山市立博物館：和歌山

特別展「写真にみる戦後の和歌山—復興と人々の暮らし」が2009年7月18日～9月6日の会期により開催されています。1945年和歌山市は戦災で焼け野原となりましたが、人びとの努力により次第に復興していきました。本展では、戦後の和歌山市が歩んだ軌跡を追い、懸命に生きた人びとの姿を写真資料で紹介しています。展示構成は、I 和歌山の復興、1 焼け野原の街、2 整備される和歌山、3 街をまもる、II 賑わう和歌山、1 経済の発展、2 観光と町村合併、III 和歌山の人々と高度経済成長、1 人々の暮らしと災害、2 高度経済成長と新しい時代、です。

関連して特別講演会、四天王寺大学教授高嶋雅明さんの「戦後和歌山の復興」が7月25日に、映画会「和歌

山城再建記」が8月1日に、ビデオ上映会「和歌山大空襲」が8月8日に、スライド上映会「戦後和歌山の姿」が8月15日に、いずれも本館2階講義室で開かれます。

Tel:073-423-0003 Fax:073-432-9040

<http://www.wakayama-city-museum.jp/top.htm>

米子市立山陰歴史館：鳥取

特別企画展「戦争の記録展」が2009年7月18日～8月31日の会期により開催されています。米子市域には1945年8月の太平洋戦争終結まで、日本海側の両三柳と中海側の大篠津の2か所に飛行場がありました。これは戦時下の国策を時代背景にして完成された飛行場でした。本展では、第二次世界大戦と戦後の混乱期の米子市における戦争の歴史を紹介しています。当時の市民生活は町内会ごとの防空演習、食糧や衣料品などの生活必需品が統制されるなど日常生活においても大きな変化がありました。戦時下の市民の暮らしに戦争がどのような変化をもたらしたかを、残された資料や写真パネルなどで振り返るものです。

Tel:0859-22-7161 Fax:0859-22-7160

<http://www.yonago-city.jp/bunka/histmus.htm>

福山市人権平和資料館：広島

企画展「'08 ふくやま人権平和フォト市民作品展」が2008年11月20日～12月24日の会期により開催されました。日々の生活の中で、一人ひとりの人権が大切にされ、心豊かに希望を持って生きている瞬間や、平和な社会を表現した写真を、広く市民から募集し、「市民が参加する人権週間」として展示したものです。

企画展「地球環境を考える」が2009年1月20日～3月22日の会期により開催されました。地球温暖化による異常気象により、干ばつや集中豪雨、永久氷河の後退、水没の危機にある島など、世界各地で被害が報告されています。そして皮肉にも、その最も深刻な被害は、貧しい国の人びとに集中しているのです。こうした状況を勘察し、環境と人権の関わりについて、私たちにできることは何かを考えていくものでした。

企画展名「ビルマ軍政下に生きる人びとー1993～2005」が2009年4月22日～5月31日の会期により開催されました。フォトジャーナリストの宇田有三さんが、13年間にわたるミャンマーの取材で撮影した写真を「都市にくらす」「信仰にくらす」「田舎にくらす」の3部に編集したものです。なかなか知る機会のないミャンマーの人びとの暮らしを知り、人権について考える貴重な素材になるものでした。

企画展「婦人少年局誕生から60年ー『女性の時代を拓いた小さな印刷物』」が2009年6月2日～30日の会

期により開催されました。男女共同参画週間に合わせ、婦人少年局で発行されたポスターやパンフレット、各種資料などから、各時代の女性のおかれた状況と歩みを振り返るものでした。

企画展「『福山空襲遺跡』ーいちばん長い夜の追憶と教訓」が7月7日～10月4日の会期により開催されています。今から64年前、福山市はB29爆撃機91機による空襲を受け、市民354人の尊い命が奪われました。戦後復興に立ち上がった市民の知恵と力で今日の町が築かれましたが、今でも町のあちこちに、空襲の記憶を留めた無数の傷跡を見つけることができます。これらの空襲遺跡を紹介するものです。

Tel:084-924-6789 Fax:084-924-6850

<http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/jinkenheiwashiryokan/>

広島平和記念資料館：広島市

2008年度第2回企画展「廃虚にフィルムを回すー原爆被災記録映画の軌跡」が東館地下1階展示室で2009年2月25日～7月15日の会期により開催されました。内容は、戦時下の映画、原爆投下と調査活動、原爆被災記録映画の製作へ、廃虚の街に入る・生物班の撮影・物理班の撮影・原爆被災記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」より・製作者が残した記録・土木建築班の撮影・医学班の撮影・復興の息吹、米軍管理下での製作とフィルムの接收1、米軍管理下での製作とフィルムの接收2、21年ぶりに返還されたフィルムなどです。

Tel:082-241-4004 Fax:082-542-7941

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/>

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館：広島市

企画展「しまつてはいけない記憶ー救護の場所を求めて」が地下1階 情報展示コーナーで2009年4月1日～2010年3月31日の会期により開催されています。原子爆弾で広島多くの人が死傷しました。薬も食糧もなく避難する多くの人びとのために、焼け残った建物や周辺の施設には救護所が設置されました。そこには治療してもらおうため、あるいは食糧を求めて被災者が集まりました。この企画展では、こうした建物や施設の様子が書かれた体験記を中心に紹介しています。展示には、体験記24編、関連資料（実物）11点、三面シアターによる映像（3編、約13分）があります。

Tel:082-543-6271 Fax:082-543-6273

<http://www.hiro-tsuitokenkan.go.jp/>

高松市市民文化センター平和記念室：香川

常設展示室内収蔵品コーナーで 2009 年 2 月 1 日～5 月 31 日の会期により、最近の平和記念室収蔵品が展示されました。

常設展示室内収蔵品コーナーで 2009 年 6 月 2 日～9 月 30 日の会期により、戦時下の日用品が展示されています。

高松空襲写真展が高松市市民文化センター 1 階ロビーで、2009 年 6 月 27 日～7 月 12 日の会期により開催され、高松空襲に関する被災写真・パネル・絵画などが展示されました。

Tel:087-833-7722 Fax:087-861-7724

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/1794.html>

ドイツ館：徳島・鳴門市

ドイツ館では、常設展示のほか、企画展示の開催や、毎年 10 月には「ドイチェス・フェスト in なる」とのイベントも開催されています。また、その周辺には、ドイツ橋、慰霊碑等の俘虜たちの残した遺跡や、その後のドイツとの交流で造られた「ぼんどうの鐘」、ベートーヴェン「交響曲第九」日本初演の地を記念して 1997 年に造られた「ベートーヴェン像」等の記念施設が点在しますので、ドイツ館にお越しの際は、周辺施設も併せてお楽しみください。

<2009 年度の行事予定>

7 月 25 日 (日) ～	夏休み宿題自由研究サポート
7 月 26 日 (日)	
7 月開催予定	リューネブルク展 (姉妹都市締結から 35 周年記念)
8 月 10 日 (月) ～	ドイツビールポスター展
8 月 20 日 (木)	
8 月 13 日 (木) ～	ドイツビール祭とジャズコンサート
8 月 15 日 (土)	
8 月 30 日 (日)	若槻さんソプラノコンサート
9 月 16 日 (水) ～	中野慶子お花展 (仮)
10 月 15 日 (水)	
9 月 20 日 (日)	ドイツ食文化フェア
10 月 16 日 (金) ～	「モダン青島」展 (仮)
11 月 4 日 (水)	
10 月 25 日 (日)	ドイチェス・フェスト in なると
12 月 1 日 (火) ～	ベルリンの壁崩壊から 20 年パネル展
12 月 15 日 (火) 予定	
12 月 13 日 (日)	ドイツ館の第九コンサート
12 月 23 日 (水)	コーラス 9 コンサート
1 月 10 日 (日)	近藤信貴ピアノコンサート
2 月 14 日 (日)	バレンタインコンサート (予定)
3 月開催予定	平和村チャリティーイベント

福岡市博物館：福岡

「戦争とわたしたちの暮らし 18」が常設展の中の部門別展示室 1 (歴史展示室) で 2009 年 4 月 21 日～6 月 21 日の会期により開催されました。6 月 19 日の「福岡大空襲の日」の前後に、館蔵の戦時関係資料を展示するシリーズの 18 回目です。今回は、さまざまな物資が不足した状況のなかで生まれた「代用品」などを中心に、戦時期の人びとの暮らしをしのぶものでした。

Tel:092-845-5011 Fax:092-845-5019

<http://museum.city.fukuoka.jp/>

長崎原爆資料館：長崎市

2009 年度第 1 回企画展「被爆国民学校展」が地下 2 階の企画展示室で、2009 年 4 月 24 日～7 月 9 日の会期で開催されました。この企画展では、被爆した国民学校の写真とその学校の被害の概要・特徴を展示しました。まず、国民学校がどのような年齢の児童が通っていたのか、現代と比較できるように模式図を展示していました。ついで、特に被害の大きかった、城山国民学校、山里国民学校の、コーナーを設けて展示していました。展示した写真は、原爆によるきわめて大きな破壊の爪あとを記録しているものです。この写真を、荒廃した国民学校の建物としてだけではなく、この校舎に通っていた児童はどうなったのだろうか、その児童にはどんな夢や未来があったのだろうか、ということをも自分のことに置き換えて考えるきっかけとすることと、被爆した国民学校の惨状から、平和の大切さを感じてもらうことが、開催の趣旨でした。

Tel:095-844-1231 Fax:095-846-5170

<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/na-bomb/museum/>

沖縄県平和祈念資料館：糸満市

『戦争と人々、民族、人生讃歌』をテーマにした名作の舞台一写真家・栗原達男がみた文学の世界」が 1 階企画展示室で 2009 年 3 月 14 日～22 日の会期により開催されました。

企画展「新収蔵品展—平成 20 年度新収蔵資料」が 1 階企画展示室で 2009 年 6 月 16 日～7 月 31 日の会期により開催されました。

関連講座が 2 回開催されました。「沖縄戦を語り継ぐ若人たち—壕が伝えるメッセージ」が 2009 年 7 月 4 日に「壕プロジェクト」メンバーと波平エリ子さんを講師に開かれました。「壕プロジェクト」は、沖縄大学の学生を主とした、繁多川・真地地域を中心に自然壕と構築壕の調査をおこなっている団体です。戦争激化による避難時の様子などの聞き取り調査や、追体験の学習会等の活動

をおこなっています。

「沖縄戦で破壊された円覚寺—“琉球円覚寺 1/10 模型”製作の道のり」が 2009 年 7 月 11 日に「円覚寺模型製作」メンバーと鹿島拓朗さんを講師に開かれました。「琉球円覚寺 1/10 模型」は、2005 年より 4 年の歳月をかけて沖縄職業能力開発大学校住居環境科の卒業研究として取り組み製作された作品です。

2008 年度第 4 回子ども・プロセス企画展「平和な世界で暮らしたい—地球に地雷はいらない」が 1 階子ども・プロセス展示室（ゆいまーる広場）で 2009 年 1 月 13 日～2 月 16 日の会期により開催されました。

2008 年度第 5 回子ども・プロセス企画展「いただきます・ごちそうさま—世界につながる私たちのおなか」が 1 階子ども・プロセス展示室で 2009 年 3 月 3 日～25 日の会期により開催されました。身近な食べものがどこの国からやってくるのか、また海外からくる家畜の飼料や資源について紹介していました。展示会を通して、世界につながる私たちの食べ物や食の大切さについて考えてもらいたいという趣旨で開かれたものです。

2009 年度第 1 回子ども・プロセス企画展「児童・生徒の平和メッセージ秀作展」が 1 階子ども・プロセス展示室で 2009 年 4 月 20 日～5 月 20 日の会期により開催されました。

2009 年度第 2 回子ども・プロセス企画展「沖縄戦と子どもたち—命の大切さ 平和について考えよう」が 1 階子ども・プロセス展示室で 2009 年 6 月 1 日～7 月 10 日の会期により開催されました。

関連して、「平和祈念読み聞かせ会」が 2009 年 6 月 23 日に 1 階平和祈念ホールで開かれました。

Tel:098-997-3844 Fax:098-997-3947

<http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp>

ひめゆり平和祈念資料館：沖縄・糸満市

開館 20 周年記念特別企画展「ひめゆり学園(女師・一高女)の歩み」が第 6 展示室で 2009 年 6 月 1 日～2010 年 3 月 31 日の会期により開催されています。この企画展では、戦前のひめゆりたちの学校生活、戦争に巻き込まれていく過程が、多くの証言や遺品とともに展示されています。

Tel:098-997-2100 Fax:098-997-2102

<http://www.himeyuri.or.jp/>

対馬丸記念館：沖縄・那覇市

第 11 回特別展「世界の平和児童画展—対馬丸学童に捧ぐ」が 1 階の企画展示室で 2008 年 12 月 16 日～2009 年 1 月 15 日の会期により開催されました。

今年は「皆既日食が世界で最も長く観察できる島」と

して「悪石島」の名前がよく報道されましたが、1944 年 8 月 22 日、対馬丸が悪石島周辺海域でアメリカの潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没し、名前が渡っている犠牲者だけでも 1418 人に及んだことも想起されるべきでしょう。

Tel:098-941-3515 Fax:098-863-3683

<http://www.tsushimamaru.or.jp/>

那覇市歴史博物館：沖縄

「沖縄戦展 戦後を生きる」が 2009 年 5 月 15 日～6 月 30 日の会期により開催されました。激しい戦闘で肉親を失い、心身ともに傷つきながらも、沖縄の人たちは戦後をたくましく生きぬきました。展示会では、米軍機の燃料タンクでつくられた洗面器やお膳などの生活用品や写真をとおして、戦中・終戦直後の暮らしを紹介していました。

Tel:098-869-5266 Fax:098-869-5267

<http://www.rekishu-archive.city.naha.okinawa.jp/>

佐喜真美術館：沖縄・宜野湾市

【展覧会・イベント情報】

5/8 比嘉豊光写真展—シマの匂い、シマの風(6/15 まで)

5/30 フクギの雫～忘れたいけど忘れてほしくない 忘れてはいけない～宮森「630 館」設置資金造成公演

6/13 比嘉豊光写真展 関連イベント

第一部：シンポジウム「赤いゴーヤー」からいま・沖縄を視る

(東松照明・土屋誠一・比嘉豊光)

第二部：詩の朗読会

(川満信一・中里友豪・高良勉)

6/17 ジェームス中川写真展—BANTA(7/20 まで)

6/20 ジェームス中川写真展 関連イベント

第一部：シンポジウム

(竹内万里子・比嘉良治・ジェームス中川)

第二部：オープニングパーティ

6/23 翁長剛 慰霊の日コンサート

友の会会員募集中！

常設展、特別展を問わず、期間中は何度でも無料で入館できます（1 年間フリーパス）。

※ただし有料イベントなどは除きます。

年会費 3000 円

お申し込みはメールで。info@sakima.jp

Tel:098-893-5737 Fax:098-893-6948

<http://sakima.jp>

(なお日本からは平和資料館「草の家」の山根和代さんが参加しました。)

平和のための博物館国際ネットワーク(INMP)役員会の報告

(2009年6月ジュネーブにて)

INMP 代表 Peter van den Dungen

2009年6月19～21日にスイスのジュネーブで平和のための博物館国際ネットワーク(INMP)の役員会が開かれた。役員会には12人の役員(ヨーロッパ諸国、日本、インド、アメリカ)が出席し、国際赤十字赤新月博物館館長のロジャー・マヨウ氏のお世話で開催された。

会議では、定款、役員の仕事分担、財政、会員制度、ハーグでの事務局、ウェブサイト、ロゴ、次の国際会議開催時と場所について話し合われた。ゲルニカ平和博物館の Iratxe Momoitio さんが当面 INMP の事務局員、アメリカのデイトン国際平和博物館の Steve Fryburg さんが財政係、オランダの Gerard Loessbroek さんが会費担当事務局員に選出された。ハーグの事務局で勤務できる事務局員は、財政上の理由でアルバイトができる人を1年間雇うことにした。現在募集中であるが、そのために人事委員会が設けられた。事務局員の決定後最初の仕事は、正式な会員の事業計画を立てることである。

現在あるウェブサイトをよくするために討議されたが、今後も Steve Fryburg 氏が担当の予定である。出版活動をおこなうために、編集委員会が設置された。昨年総会で決定されたロゴについて、文字の位置など細かいことが話し合われた。

バルセロナ市から正式に次回国際会議開催の招待状が来たが、2010年11月か2011年3月に開催することで合意した。3日間開催し、150名の参加者を予定している。バルセロナを見渡せる丘にある Montjuic Fortress (要塞) という所で開催されるが、現在バルセロナ市はそこをバルセロナ国際平和センター(常設平和展示設備のある)に変えようとしている。

役員会参加者のために、マヨウ氏は安齋育郎教授の国際ネットワークに対する長期にわたるたゆみない努力に対して、お礼の手紙を出した。安齋教授は最近寛大なことにハーグの事務局を開設する援助として国際ネットワークに1万ユーロ募金して下さったのである。

役員会のメンバーは、国際赤十字赤新月博物館やジュネーブの平和に関連した場所の訪問を楽しむことができた。特に市役所にある歴史的なアラバマルームは、1864年に最初のジュネーブ条約が調印された所であり、またアメリカの南北戦争をめぐる英米の対立の際調停された所である。

国際ネットワークとして、効率的に会議の開催を下させた寛大なロジャー・マヨウ氏に感謝するものである。

全アフリカ和解センター：1988年にラゴスで創設

全アフリカ和解センターは、非暴力と献身的な愛に基づいて社会政治的・道徳的解放のために活動する草の根の組織である。そこにはアフリカの12か国とヨーロッパにおける教育機関、宗教組織、個人からなる700の会員がいる。このセンターは、アフリカだけでなく世界中の平和に対する脅威を取り除くために、署名活動をして世論を高めようとしている。平和を脅かすものに対する対応について書き、それを行政、宗教、政治面での権威者に送り届けている。そして政治的権威者が正しい決定をするのを援助するために、情報提供、研究、コミュニケーションの取り組みをしている。その取り組みの焦点は、社会的・経済的正義、非暴力、難民、社会的対立、異宗派間の活動、若者と女性である。非暴力の分野においては、アフリカ諸国における平和、社会正義、和解に関するワークショップを組織している。難民に関しては、追放された人びとに対する救援物資提供と社会福祉サービスを組織している。社会的紛争の分野では、共同社会間の紛争の原因について研究と資料収集をおこなっている。社会的紛争解決の際、和解センターは仲介者としての役割を果たし、アフリカ地域内及びアフリカ地域間における紛争に関して早期警告をしている。異宗派活動の一つとして、和解センターは積極的な非暴力、平和、社会正義、和解に関して信仰を重視した教育的資料に取り組んでいる。

また平和、人権、民族自決、独立独自行のための草の根運動にも取り組んでいる。若者と女性のために特別の活動がおこなわれている。この和解センターでは、若者の指導者としての訓練活動をおこない、子どもの虐待や女性差別をなくす国際的な運動の調整をしている。非暴力と平和の問題に関して、学生の支援もしている。

(ウェブサイトより)

PARC (Pan-African Reconciliation Centre): P.O. Box 9354, Marina 101001 Lagos City, NIGERIA

Tel: +1-234-726-8676

Mobiles: +234-805-400-3843, 8033876216

Fax: +1-267-821-6944, 610-822-7423

<http://www.wfm-igp.org/site/pan-african-reconciliation-centre>

Email: afropax@gmail.com

国立オーストラリア博物館：2001年キャンベラで創設

国立オーストラリア博物館は、オーストラリアの国土、民族、人びとに関する展示をしている。オーストラリア

の歴史においては、オーストラリアの先住民や普通のオーストラリア人の展示をしている。オーストラリアの先住民については、聞き取りをもとに展示がなされている。持続可能な環境問題も取り上げ、展示だけでなく子どもや一般の人びとが環境問題について学ぶことができるような取り組みをしている。従って広い意味で、平和のための博物館とすることができるであろう。

所在地：National Museum of Australia: Lawson Crescent, Acton Peninsula, CANBERRA ACT 2600

連絡先：GPO Box 1901, CANBERRA ACT 2601 AUSTRALIA

Tel: +61 2 6208 5000

Fax: +61 2 6208 5099

<http://www.nma.gov.au/index.html>

information@nma.gov.au

オーストリア抵抗資料館：1963年にウィーンに創設

ウィーンにある古い市役所には、オーストリア抵抗運動の資料館がある。その抵抗博物館には、オーストリアファシズム(1934-38)に対する活発な抵抗運動、及び1938年から1945年までのオーストリアにおける国家社会主義の下での迫害や抵抗運動に関する展示がある。この間2700名のオーストリア人が政治的な理由で裁判にかけられ、死刑を宣告され、処刑された。約13万人のオーストリア人が、政治的または民族的な理由のため祖国を離れざるを得なかった。抵抗運動活動家や歴史家は、ドイツがオーストリアを併合後恐ろしい出来事が起こったこと、そして抵抗運動参加者の犠牲と苦難について若者の教育をするために資料館を設立した。筆者が訪問した際、展示にネオ・ファシズムの台頭を警告した写真もあった。次のウェブサイトにて情報が載せられている。

<http://www.planetware.com/vienna/old-town-hall-museum-and-archives-of-austrian-resistance-a-w-var.htm>

所在地：Museum and Archives of Austrian Resistance (Dokumentationsarchiv des Österreichischen Widerstandes) : A-1010 Wien, Wipplingerstrasse 8, Austria

Tel: 0222-53436 Fax: 0222-5343699

国際エスペラント博物館：1927年ウィーンに創設

国際エスペラント博物館には、エスペラントなどに関する本が約22,000冊ある。この博物館は、オーストリア国立図書館の一部であり、下記のウェブサイトにて情報が載せられている。(ドイツ語)1990年以來新しい本は国立図書館のオンラインカタログに入れられ、インターネットを通して世界中で本の題の検索が可能である。1990年までに出版された本も、今後インターネットで検

索できるようにする予定である。この情報は、下記のウェブサイトにて入手した。

http://www.cs.chalmers.se/~martinw/esperanto/iemw/index_en.html

筆者が訪問した際、日本語の資料「民際語エスペラントで相互理解を！」があり、日本エスペラント学会の紹介がされていた。(連絡先：Tel: 03-3203-4581, Fax: 03-3203-4582

E-mail : esperanto@jei.or.jp)

エスペラントを通して平和のために活発に交流しているのが、ウズベキスタン共和国にある国際平和連帯博物館である。

所在地：Esperantomuseum: Palais Mollard, Herrengasse 9, Postfach 308, A-1015 Wien, Austria

Tel.: (+43 1) 534 10-730 Fax: (+43 1) 534 10-733

plansprachen@onb.ac.at

解放戦争博物館：1996年バングラデッシュのダッカに創設

バングラデッシュは1971年12月にパキスタンから分離独立した。そこに住むベンガル人は1970年の総選挙で勝利したが、パキスタンの軍事政権に抑圧され、1971年3月軍事政権に協力しない運動をおこなった。その結果軍事政権はベンガル人の虐殺をおこない、約300万人が殺され、約20万人の女性が強姦され、一千万人の人びとがインドに難民として逃亡しなければならなかった。

解放戦争博物館は、ベンガル人が民主主義と国家の主権を求めた戦いを記念して創設された。ここでは解放戦争に関連した物を収集・保存し、そして展示している。博物館は、当時の記憶と遺品を保存するために、地域の指導者が中心になって創られた。ここでは、バングラデッシュの歴史と現代の社会的人道主義的諸問題を関連付けて展示するように努力している。これは下記のウェブサイトの情報に基づいている。

所在地：5 Segun Bagicha, Dhaka-1000

Tel: 9559091

Fax: 88-02-9559092

www.liberationmuseum.org

mukti@citechco.net

アントワープ平和センター：1987年にベルギーのアントワープに創設

ベルギーは何世紀にもわたって戦場になったので、市民は平和の重要性を認識している。アントワープ平和センターは、アントワープ市から財政的援助を得て創設されたが、現在EUの情報を提供しているEurope Directという組織のある建物にあり、Europe Directと協力し

て平和に関する情報を提供している。平和センターは、展示会、セミナー、討論会、ワークショップ、講演会などを開催し、平和の文化を促進するために重要な役割を果たしている。また市民や平和団体などが平和に関して討論会や講演会を開催する際、会場を提供している。2008年秋には、広島・長崎の被爆者に関する写真展示会をおこなった。

館長: Ms. Marjolein Delvou

所在地: Lombardenvest 23, 2000 Antwerp, Belgium

Tel: +32 3 202.42.91 Fax: +32 3 202.42.99

vredescentrum@admin.provant.be

www.vredescentrum.be

カンボジア地雷博物館、予防・リハビリテーションセンター: 2007年アンコールに創設

地雷博物館では、貴重な歴史的教訓が説明されており、戦争の恐ろしい結果について、われわれに厳しく警告している。このようにしてそれは世界で最も重要な文化遺産の一つになったのである。カンボジアの至るところに戦闘の20年以上の間に一千万個もの地雷が配置されたと推定されている。多くの地雷はさまざまな地雷除去組織によって取り除かれているが、それでもまだカンボジアの田舎の至るところに数百万個の地雷が散在していると考えられている。地雷やまだ爆発していない兵器は、すべて除去されるまでは危険である。カンボジア地雷博物館救援基金は、カナダとカンボジア政府に対して非営利非政府組織として登録されているし、地雷博物館を経済的に支えている。その目的は、第一に人びとが地雷の事故に遭わないように教育をする地雷博物館を設立すること、そして第二に地雷の事故に遭った生存者のための教育設備、教育プログラム、そしてリハビリ施設を提供することである。(これはウェブサイトによる。)

連絡先: Cambodia Land Mine Museum, Prevention and Rehabilitation Centre: Box 197 Bayfield, Ontario, N0M 1G0, Canada

Tel: 855-92-917-003 or 855-12-598-951

info@cambodialandminemuseum.org

www.cambodialandminemuseum.org

カナダ平和教育センター: 1997年にアルバータに創設

カナダ平和教育センターの目的は、「地球規模で考え、地域で行動すること」、地域に平和を構築すること、戦略上重要な行動計画、ネットワーク、情報の共有などを通して、永久に続く平和を促進するために世界中の人びとを結びつけることである。またこのセンターは、さまざまな国の協力を促進し、人びとの間の友好関係と平和的理解を深め、人間の発達と経済の発展を促進するべ

きである。

長期的な目的は、次のような内容を含む。

1. 平和教育、情報の普及、ネットワークングのための実際のセンターを実現する。
2. 個人、政府、NGO やビジネス間の「平和のための協力関係」を築く。
3. 暴力や犯罪を減らすために、個人、一般の人びと、組織を活動的にする。
4. 平和への意識を高め、平和教育とネットワークングをおこない、人びとの認識を高める。
5. 平和への目標を明らかにし、成果を達成するための取り組みを集中しておこなう。

詳細は、下記のウェブサイトにある。

連絡先: Canadian Centres for Teaching Peace: Box 70 Okotoks, AB Canada T1S 1A4

Tel: (403) 461-2469 Fax: (309) 407-6576

<http://www.peace.ca/overview.htm>

stewartr@peace.ca

平和のための公園: 1997年にチリのサンチアゴに開園

「平和のための公園」(Parque por la Paz)は、1997年9月30日に造られた非営利団体である。1997年3月24日に平和のための公園は、政府と人権問題に取り組む地域社会の援助を得て開園した。

その目的は、次の通りである。

1. ヴィラ・グリマルディやその他の拘留拷問センター、その設備や象徴的な場所の歴史と記憶を保存する。
2. 人権に対する意識を広め、高める。
3. その他の国や国際的人権団体とさまざまな活動を創り、活動を続け、また活動を統合していく。
4. 社会のために「平和のための公園」を管理し、保存し、発展させる。

このような目的を達成するために、この団体はさまざまな文化的、社会的、政治的、宗教的な活動などを組織する。またこの団体は、平和のための公園の管理に責任を負うものとする。

所在地: The Park for Peace (Parque por la Paz) : Jose Arrieta 8401, Santiago, Chile.

http://www.villagrimaldicorp.cl/eng/index_eng.htm

“NO MORE HIROSHIMA: NO MORE NAGASAKI: 平和博物館: インド

バルクリシュナ・クルヴェイ館長

Dr. Balkrishna Kurvey

インド平和軍縮環境保護研究所は、1996年8月6日に「ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ平和博物館」

を創設した。主に被爆の実相とインドのボクハラン核実験の写真が展示されている。核兵器廃絶の世論を高め、政府に圧力をかけ、より良い世界を構築することを目的としている。

インドの開発は進んでいるが貧富の差が大きく、飲み水や医療設備の不足などの問題がある。人びとに核実験の費用や影響について知らせ、どこにお金を使うべきかを知らせる必要がある。

ほとんどのインド人は広島と長崎で起こったことを知らない。核兵器により環境や健康に大きな影響があることはわかっている。地下核実験をおこなっても放射能を帯びたガスは大気に放出され、また長期的には地下水の汚染があるかもしれない。結果は何千年後に明らかになるかもしれない。

インドとパキстанは核兵器を所有し、軍拡競争がおこなわれている。そこには複雑な理由がある。核兵器を所有してこそ安全が保障されるというのは、根拠のない考えである。両国には不信感、誤解、敵意があり、過激な軍人や政治指導者が核戦争を始める可能性がある。パキстанのテロ集団は核兵器を所有しているかもしれない、もしそうであれば全世界にとって危険である。

核兵器を所有してもわれわれの問題は解決しない。変革をすることができるのは、人民である。核戦争はインドとパキстанの誤解のために生じるかもしれない。どちらかの国がミサイルの使用で威嚇すれば、恐ろしいことになる。なぜなら両国間の距離は非常に短いので、ミサイルが核兵器を搭載しているかどうかを判断する時間がないであろう。ミサイルが相手国に届くのにわずか8～10分しかかからず、それが通常兵器か核兵器かを判断するのにわずか3分しかなく、誤解のために核戦争が起こりうるのである。核兵器は軍事的武器ではなく、政治的な武器なのである。核兵器は経済的な負担となり、経済的に大惨事を引き起こし、まったく役に立たず、倫理的・道徳的に受け入れることができないものである。人びとは、力は大量破壊兵器である核兵器から生じるのではなく、経済的な力によって生じることを知る必要がある。南アジアにおける教育のある人びとは、核兵器についてよく知らないのである。核兵器の即時、及び長期的影響は、人びとに知られていないのである。

人びとに通常兵器と核兵器の違いを知らせる必要がある。系統的な教育の計画によってのみ、核兵器のできるだけ早い廃絶が可能である。

イスラム教もヒンズー教も平和に高い価値を認めている。平和博物館では人びとの意識を高める平和教育の取り組みをおこなっている。常識ある人びとは、核兵器は非人道的、非道徳的、違法、非民主的であり、安全を保障しないことを知る必要がある。平和は人類の進歩にとって、最も基本的な出発点である。平和ほど尊いものはない。平和ほど幸福をもたらすものは他にない。平和博

物館はさまざまな取り組みをおこなって、このような平和の実現ができるであろう。

1996年から常設展示以外に、インド各地で8月6～9日に展示を始めた。数多くの生徒や一般市民が平和博物館や移動展示物を見学し、核兵器のない世界に向けて印象的な感想を書いている。

Indian Institute for Peace Disarmament & Environmental Protection: 537 Sakkardara Road, Nagpur 440009 India

Tel: 91-712-2745806 Fax: 91-712-2743664



平和の鐘プロジェクトについてのアピール 広島・長崎原爆投下を追悼して

広島・長崎に原爆が投下された時間にベルを鳴らそう。日本時間でも、あなたが住んでいる地域の時間でも可(広島 8/15 午前8時15分、長崎 8/9 午前11時2分)。子供たちと未来のために核兵器のない世界を作ろう。ベルをならす予定を知らせてもらえれば、ウェブサイト www.universalpeaceday.com に掲載。

Envision Peace Museum

Envision Peace Museum は、平和でエコロジカルな持続可能な世界を目指してアメリカ・ペンシルバニア州フィラデルフィアで開設準備中の新しい機関である。平和を創造する方法の情報源となりうる、そして地域、国家、世界それぞれのレベルでの変革を目指す非暴力活動推進組織のリーダーになろうとするものである。

このニュースレターの目的は、読者やニュースレターの発行者、これを受け取っているすべての人びと—Envision Peace Community に情報を与え、鼓舞し、行動に向けて励ますことにある。われわれのホームページが示しているように、平和は進展している。われわれのゴールは、変革を遂げた世界を目指す行動の力強いきっかけとなることである。

博物館の構築に向け、各人がどのような方法で携わることができるのか、近く発行される会報を注意深く読ん

で欲しい。

<2009年の重点課題>

われわれは、必要な資金を集めることができなければ、目標と重点課題は意味を持たなくなる。博物館の建設に必要な資金集めはもちろん後に必要となる。現時点では、始動のための資金を集めることに重点を置いており、まずはフィラデルフィアの観光地区にオフィスを設置し、スタッフを配置しようとしている。その費用に6万ドルが予算化されている。それとは別に、初回の展示会「信頼の喪失」(ホームページ上でも見ることができる)よりさらに意欲的な移動展示のための補助金を申請している。

資金集めを最重要課題とし、どの活動においてもこれをいかに支援するかを注意して考えていく必要がある。われわれの夢、使命とヴィジョンを決して忘れてはならない。

<博物館の外観は?>

博物館は平和に貢献できるのか?どんな建物になるのか?

この疑問に対する答えは、平和博物館というのは思想の博物館だということである。芸術や歴史の博物館とは異なり、思想の博物館は物語やメディア、芝居、講演、議論といったソフトを扱う。われわれの博物館では、来館者に非暴力について教育し、変革に向けて活動してもらえるようにすることが最も重要である。そのためにオンライン博物館や移動展示や企画など、ウェブ上で見ることができるようになる。しかし新たな大博物館をフィラデルフィアを中心に作るこそが最終目標である。そこは大きな展示場となるのみならず、博物館のコミュニケーション活動のオペレーションセンターとなり、世界の希望と決断の新しい波の象徴となるのである。

本博物館には、大学の教授や学生など多くの才能ある人びとが専門的サービスを提供するために集まっている。2008年の秋にはDrexel大学の建築科で有名な5人の研究者のもとで学ぶ学生たち50人が博物館の概念デザインを作り上げた。そのうちの一人、ベンジャミンフランクリンパークウェイに炎の像を作ったKara Haggertyは、いかに人びとにこの博物館を訪れてもらうかを考えてこの像を作ったと語っている。

<企画・プログラム>

*プログラム:「信頼の喪失」展 2009.5.1-6.30 Arch Street Quaker Meetinghouseにて

*企画:フィラデルフィアでの秋の資金調達企画を計画
中。

Envision Peace Museum: P. O. Box 58067

Philadelphia, PA 19102

<http://www.envisionpeacemuseum.org/index.html>

ArtPEACE —国際平和へのヴィジョンを共有しよう 2009年国際平和デー 芸術展

2009年国際平和デーでは、ArtPeace展への芸術家、学生その他興味のある方の参加を呼びかけます。世界中から、みなさんの国際平和のヴィジョンを表した作品を募集します。

締切:2009年7月15日(メールまたはオンラインによる提出)

展示期間:2009年8月1日~2009年8月30日(各展示によって異なる)

資格:プロアマ、制作材料問わず。学校の正課で取り組んだ作品歓迎。オンラインまたはメールによる提出可。オリジナル作品のみ。個々人の国際平和に対するヴィジョンを表現した作品であること。複数による作品の場合は全員の名前で応募。

提出された作品は国際平和デーに関する展示・出版に使用されることをあらかじめ了解のこと。作家の許可ある場合、国際平和デーの資金のために作品をオークションにかける場合がある。作品は返却しない。

提出要領:(省略)

コーディネータ: Universal Peace Initiative ·
New York Buddhist Church ·The Church of St. Paul
& St. Andrew

www.universalpeaceday.com

ピカソのゲルニカ、ロンドンに帰る

ピーター・ファン・デン・デュンゲン

この4月から、来年4月まで、ロンドンのホワイトチャペルギャラリーで、興味深い展覧会が開かれています。これはポーランド人のアーティスト・Goshka Macugaの「獣の本質」と名付けられた設備の展示で、ピカソのゲルニカのタペストリーがそのままにすえてあります。このタペストリーは、いつもはニューヨークにある国連本部の安全保障理事会会議室の外に展示されていて、重要な記者会見の時の背景となっていて注目を集めています。建物の改修のため、この1年、ロンドンにいます。1955年にネルソン・ロックフェラーがピカソに、彼のかの有名な作品をベースにしたタペストリーを制作するように要請しました。それは、1937年のバス空爆に対する彼の苦悩を描き出したものでした。そのタペストリーはジャクリーン・デ・ラ・ボーメ・デュルバッハによってウールの織物となり、1985年にロックフェラー夫人から国際連合に貸与されました。

また、そのタペストリーの前には、安全保障理事会を象徴するガラスを載せたオーク材の丸いテーブルがあり、そのテーブルは8つのセクションに分けられていて、ガラスの下に歴史的な出版物、写真、文書を用いてゲルニカの絵、あるいはタペストリーの各局面が展示されてい

ます。テーブルの周りには、各セクションの展示物がくつろいで見られるようにぐると椅子が置かれています。一つのセクションでは、ホワイトチャペルギャラリーとゲルニカの昔からの関係について展示しています。1939年、イギリス国内で唯一、この場所でゲルニカの展覧会がありました。それはスペイン内戦で飢餓にくるしむ女性と子どもを助けるための募金活動の一環として開催されたのでした。別のセクションは、1937年に初めてゲルニカが展示されたパリ万博についてです。また、アメリカ国務長官・コリン・パウエルの悪名高い演説—2003年2月5日の安全保障理事会の前に、大量破壊兵器を保持しているらしいからイラクを攻撃すると言った—を読むこともできます。この時、史上はじめて、このタペストリーは覆い隠されました。作品のもう一つの部分は、キュービズム派のブロンズ彫刻で、パウエルが小瓶を掲げて常任理事会で演説している姿です。

すべての展示が歴史的なものではなく、あるセクションには現代の抵抗運動に関する冊子、ポスター、ハガキ、中には最近ロンドンで行われたG20サミットや反資本主義者・反銀行宣言に関するものもあります。ホワイトチャペルギャラリーは、イギリスで最も古く、最も重要な公的な美術館のひとつで、最近改修拡張され、リニューアルオープンしました。この魅力的な展覧会をとおして、そのパイオニア精神と、しばしば政治的に過激ともいえる展覧会を引き続き開催しています。「獣の本質」という題の本が2009年10月に出版される予定です。

バルカンの平和探訪ツアー

トッド・ウォルターズ: アメリカプロジェクトのPR

アルバニア、コソヴォ、モンテネグロの若者とともにバルカン平和公園を利用した体験型の平和創造探訪ツアーを開催しますので、ご協力をお願いします。皆さまのご協力によってこの探訪ツアーが開催でき、また探訪ツアー実施後に、これら3つの地域のための若者向けのサービスプロジェクトをおこなったり、企画の成功を世界中に発信するための出版キャンペーンを展開したりする基金を作ることができます。

国際平和公園探訪ツアーについて

国際平和公園探訪ツアーは、地球環境に配慮した運営基準に基づき、持続可能なツーリズムの実践をおこなっています。平和公園とますます大きくなるその外交的役割を理解する異文化交流体験に加えて、冒険的なトレッキング、遠く離れた国境越え、オーガニックな郷土料理グルメといったいくつかのメニューを設けています。私たちが運営する営利活動の探訪ツアーによってこの非営利の体験型平和探訪ツアーはサポートされ、それは紛争当事者である国際平和公園を共有するそれぞれの国の若

者と協働して運営されます。

体験型平和創造とは

この平和創造プログラム—1日コース、長期の自然探訪コース—は、野外活動学習をとおして自然な平和創造の可能性を高めます。豊かで特色のある平和創造体験によって、若いリーダーたちが相互のつながりや技能、共感を育み、それぞれのコミュニティの中で、平和的な変革をうみだす仲立ちとなることを目指しています。これらのプログラムでは、知的、生理学的、感情的、心理的な学習を野外で総合的におこないます。これらの活動では、すでに効果が立証されている野外活動体験学習法とともに、ファシリテーターを交えた対話、対人関係問題の解決スキルトレーニング、伝える、能動的に耳を傾ける練習などの方法が用いられます。このダイナミックなコンビネーションは、将来のリーダーたちの中に、信頼を築き、協力を促し、許しを学び、互いの違いを尊び、偏見を乗り越え、共生する方法を知り、共感を育むのに役立ちます。

バルカン平和公園とは

バルカン平和公園とは、コソヴォ、モンテネグロ、アルバニア北部にまたがる山岳地帯を各国共有の公園としようと提案された場所で、それは平和と協力のシンボルとなり、自然環境保護を促進し、地元での雇用や、持続的なツーリズムを促進するものです。バルカン平和公園プロジェクトはこの地方に暮らす人びとと、バルカン、イギリス、アメリカなど世界各国の国境をこえた環境運動家をつなぐ草の根ネットワークです。ヨーロッパでもっとも気高かつあまり知られていない山脈の一つに位置し、国境をまたいで保護されているこの真に国際的な地域は、地元の要望、利益を高めると同時に、生物多様性を保全し生態学的責任を果たす助けとなれます。

予算

このプロジェクトの最低予算額は3,500ドルです。これにはアメリカからアルバニアのティラナ (Tirana) への航空券代、物資調達、運営の費用、体験型平和創造活動と参加者用資料代、3か国から参加する3人の若者のスポンサー経費が含まれ、最低1,000ドルはイベント後の若者向けコミュニティサービスプロジェクトの基金として使われます。

最低目標基金額を超えた場合、この企画は開始されず。そして最低目標を一定額超えるごとに、プロの写真家による探訪ツアー記録撮影に5,000ドルをかけるなど、この企画をより効果的なものに展開していきます。更なる資金があれば、探訪ツアー実施後のコミュニティサービスの基金が増大することになります。

最後に

キックスターターコミュニティ (Kickstarter community) はこの最先端に行く試みをサポートすることによってプロジェクトの世界的な影響範囲を広げるこ

とができます。それはバルカン紛争で被害を受けた若者の成長を支え、彼らがそのコミュニティの中で、平和的な変革をうながす仲立ちとなるための技術や経験を提供することができます。

さあ、問題解決の一役を担ってください！

国際平和公園探訪プロジェクト 創設者・ツアーガイド
リーダー トッド・ウォルターズ (Todd Walters)

<http://peceparkexpeditions.com>

フリーダイヤル 888-557-7485

携帯電話 978-270-9356

todd@peaceparkexpeditions.com

toddwalters33@gmail.com

平和 DVD の紹介

ロバート・リヒター(Robert Richter): アメリカ

冷戦の始まりによって、私は権力と経済力が国ぐにを戦争に駆り立て、しばしばイデオロギーという名のもとに暴力を正当化するものだ、と考えるようになりました。そして 1960 年代に「ヒロシマ乙女」という巡回展を見たときに、私は核兵器のおそろしさを知りました。

つねづね戦争の根本的原因を明らかにする前向きな平和運動家や建設的な方法に焦点を当ててきたドキュメンタリー映画製作者である私に、これらのことがらは深い影響を与えました。私の作品については

<http://www.richteroxideos.com> を参照いただき、E-mail は RRProd@aol.com へお願いします。

私の初期の平和映画の一つは「ライナス・ポーリング、聖戦の科学者 ‘Linus Pauling, Crusading Scientist’」です。この作品は、ポーリングの化学者としての驚異的な業績と、原水爆禁止運動における彼の勇氣あるリーダーシップとに焦点を当てています。彼は歴史上はじめて二つのノーベル賞—化学賞と平和賞—を単独で受賞した唯一の受賞者です。

数年後、あるカソリックの神父が私に、アメリカ人が、増大する核戦争の脅威について積極的に取り組むように働きかける作品を作ってほしいといいました。そこから生まれたのが「金属の神々 ‘Gods of Metal’」で、オスカー賞にノミネートされたドキュメンタリーです。これはアメリカと世界各国の都市でおこなわれた平和行進のシーンで終わるのですが、民主主義運動のお手本ともいえるものです。

この作品の終わりは、「われわれの手に ‘In Our Hands’」のはじまりでした。これは、被爆者、有名な芸能人、さらには警官まで、100 万人の人びとが「核兵器のレースをやめよ」と声を揃えて訴えた史上最大の平和行動を収めた 1982 年のドキュメンタリー作品です。

このデモ参加者の一人が、私の次の平和映画「ベン・スポック、赤ちゃん医者 ‘Ben Spock, Baby Doctor’」

の主人公でした。これは、先駆的な小児科医で「乳児と小児のケア」の著者であり、20 世紀の最も重要で影響力のあった人物の一人であるベン・スポックの人生、時間そして平和運動にフォーカスした作品です。

私は、1982 年のデモの指導者であるコーラ・ワイスに、1999 年のオランダ・ハーグでの世界市民平和会議の映画を作るように頼まれました。それは 100 か国から 10000 人が集まって核兵器、小型武器の取り引き、地雷や子ども兵士の使用をどうやってなくすかを議論した会議でした。映画「世界を変える 5 日間 ‘Five Days to Change the World’」は、この集会で、自分たちの未来への行動計画を作り上げていく若者たちを追ったものです。

アメリカの平和運動家で日本に住んだことのあるキャサリン・サリバンは、制作から 20 年後にテレビで放映された「われわれの手に ‘In Our Hands’」を見て、私に、長崎の二人の被爆者について映画を作るつもりはないかと尋ねてきました。「最後の原爆 ‘The Last Atomic Bomb’」では、人類の頭上に意図的に落とされた最後の原爆の真実が決して忘れられないようにと、その人生をささげた一人の被爆者と大学生たちが描かれています。ここから核拡散の現状がみてとれます。この映画は 2005 年 8 月に長崎で 60 年忌行事の一環として封切られました。

私は、あちこちでこれらの作品が鑑賞され、平和を実現するために人びとが考え、積極的な一歩を踏み出す手助けとなることを望んでいます。

中国新聞「世界の平和博物館」ウェブサイト開設

中国新聞社報道センター

ヒロシマ平和メディアセンター桑島美帆

中国新聞社は 2009 年 7 月、ヒロシマ平和メディアセンター (HPMC) のウェブサイト内に新コーナー「世界の平和博物館」を開設しました。広島市と長崎市の原爆資料館をはじめ、ノーベル平和センター (ノルウェー)、USS アリゾナ記念館 (米国)、国立ガンジー博物館 (インド) など、20 か国 31 館 (7 月 17 日現在) の平和博物館を紹介しています。

2008 年 1 月から毎月 2 回、朝刊に掲載している「世界の平和博物館」と連動。各館の館長や学芸員たちから寄せられた紹介文を、館内写真とともに日英両語で地域別に掲載しています。サイトでは、世界地図の該当エリアをクリックすると、各地域の博物館リストが出てくるようになりました。

また、紙面では 1 枚しか載せていない博物館の提供写真を 3~6 枚アップ。英語は寄稿全文を載せています。第二次世界大戦や、毒ガス兵器、良心的兵役拒否、子どもの平和教育など、博物館によって扱うテーマも多岐に渡ります。今後も紙面掲載に合わせて、コンテンツを増

やしていく予定です

なお、ウェブサイト「世界の平和博物館」へはHP M Cのトップページ (www.hiroshimapeacemedia.jp) にあるバナー「世界の平和博物館」をクリックしてください。世界中の「平和博物館」からの寄稿をお待ちしています。

中国新聞社報道センター
ヒロシマ平和メディアセンター
桑島美帆
広島市中区土橋町7-1
TEL 082-236-2803
www.hiroshimapeacemedia.jp

出版物

平和学を学ぶ人のために 君島東彦編 世界思想社
2009

広島平和科学 30 広島大学平和科学研究センター
2008 (「中学生の平和意識・認識の変容に関する実証的研究」など)

現代平和構築活動の視点から見た広島の戦後復興史
篠田英朗 2008 広島大学平和科学研究センター
IPSHU 研究報告シリーズ No. 41 核の被害再考 松尾
雅嗣編 2009

IPSHU 研究報告シリーズ No.42 松尾雅嗣教授退職記
念論文集 平和学を拓く 2009

反米大陸 伊藤千尋 集英社 2007

活憲の時代—コスタリカから9条へ 伊藤千尋 シネ・
フロント社 2008

君の星は輝いているか—世界を駆ける特派員の映画ルポ
シネ・フロント社 2005

(平和博物館に置くと良い映画を知ることができます)

9条やめるんですか?—北の国から憲法を考える 北海
道新聞社編 2007

9条 しあわせの扉: 憲法の過去、現在、その未来を考
える 高知新聞社編 2008

ビジュアルブック語り伝える空襲(全5巻): 新日本出版
社 (第11回学校図書館出版賞受賞)

*Post-war Reconstruction of Hiroshima: From the
Perspective of Contemporary Peacebuilding* edited by
Hideaki Shinoda, March, 2008 Institute for Peace
Science, Hiroshima University

Peace: A World History by Antony Adolf (Polity Press,
Wiley Distributor, \$27.95/Paperback,
\$69.95/Hardcover, 272 Pages, Publication February
2009 (UK) April 2009 (US), Non-Fiction)

Tell Me the Truth About War by Stuart Rees.
Ginninderra Press. 2004

DVD: The Day after Peace: www.peaceday.org

お願い

2009年度になりました。まだの方は2009年度会費
2000円の納入をお願いします。2008年度以前の会費を
未納の方はあわせてお支払ください。すでに納入された
方を除き、請求と振替用紙を同封しております。会費の
納入をよろしくお願いします。

おことわり

無署名の記事は、編集者の責任でまとめたものですが、
署名記事は執筆者の責任で書かれたもので、「平和のため
の博物館・市民ネットワーク」の事務局や編集者の見解
を、必ずしも示すものではありません。

編集後記

海外のニュースの和訳では、谷川佳子さん、加藤ニ
コルさん、竹田敦子さん、増田妃早子さんにたくさん
協力していただきました。心よりお礼申し上げます。